湖月抄

あし

明石

巻名哥并詞をもて号す哥よ八詞より八君
もしほやくあまとやおもふらむとも花ちるさとにも
ありうき事ありの三月よりも七歳の秋迄の

細 源氏君廿六歳の三月より廿七歳の秋迄の事也

なを雨風やまずして　細 三月
一日の上巳乃禊の時より
花鳥 周公旦のことを思
花 三月一日より同十三日まで
雨風やまずして神なりさはぐ
これ人はまことを海にそ乃
よりて周の成王の時周公旦
が弟管叔蔡叔といひし
諸侯周公旦を讒をきゝて
よりて周公東都にをる
事二年。その秋天大に
雷電して風吹果こと
ごとく禾ふす大木の根ぬ
けたり。成王そのときに金
縢の書を（此書周公の制作也）
披きみんとて周公の王宮に
功ありてさうにたがはざる
事をきゝて。そのとき
雨風とゞまりて。やみ
ことごとく起きる大木のごとき
くなりもとのごとくになる
まづ是は周公を
八二叔の讒にあいて成王の
信じゑを天へいのりける

なを雨風やまず。神なりしづまらで
日比になりぬ。いとゞ物わびしき事かず
しらず。きしかたゆくさきかなしき
御ありさまに。心づようしもえおぼしなさず。いか
にせまし。かゝりとて都にかへらん事も。
まだよにゆるされもなくては。人わらはれ
なる事こそまさらめ。猶これより。ふか
き山をもとめてや。跡たえなましとおぼすに
も。波風にさはがれて。など人のいひ
つたへん事。後の世まで。いとかろがろ
しき名をやながしはてんとおぼしみだ
る。御夢にも。たゞおなじさまなる物のみきて

しころ叔也成王の思ふるよりあるよしにて某末もりのごとくんでわたり。今源氏之を
周公旦によそへられて三日まての西風とのふる梯の意は文王の子武王の弟とこそひか
しころもぱまうへのことなり也 孟 周公東都によるる尚書序ニあれこれを下に含く
うくとらく拆称香
ふつかうしと 細 左近の拙かよ文うやうれ西風の恐怖あつハ悲このこへまれく也
世にゆうされもうすて八合らうれうう 細 伊周公のうち花角よみうらり 花 帥内大臣伊周公
播ア国にうつされて役ひそうよ叔よの事りて母君よおひ給ひと功て宇そ罪を得て
ちうらよ太宰府へうつされまうり。菅原指揮よりやうらり源氏ハこうつくし彼西よ下給ふ叔す
いうく思案し給之 細 人々ちさ憂也し給ふる也 孟 上臈の心まひて感
浪風よさうづれてちると 細 上臈の心つひて 孟 上臈の心まひて感
人口を憚うる所要よりうやうの事をよく給
由変みもうくるか 細 須磨の意にありし読へめすする也 箋同

ゑそ川く。ま川ちしこさて由とこゝのふふよ 乗の暗
ますをすくあけくろく目をさましよそへて京
のとこもいとど須磨つるすくくみうつるこ
泥そふうしつうめやしもとこゝろ御そう 放埒也
拙須をどうらそうやへくもあくらね 方
のうされよ。いそよるまつうるへ人は。二

あやしきさまうき 細 此使
也養笠するよの称なりとし
あつれなうく
ちうらひうそ 河 道のゆう
うへ 花 篁日記にも二ありと
のたうひすりし君もなれど
あとはろとするくるうこと
ろううちや
すげなひろらひ 孟 源の
世よ陽座の時ハ追捧ひるる
どもうやうの着すれどもと
る川しくえ言之
我るがくうくうけすく
細 花 驚る座の字也男を
ろうりさんしてよむ帝
我みくらくかうの抱をる
つうしく世おもしく対面あ
るつとのうずつてきき也之
あさまうくとやそとなれさ
細 紫上うりの文乃細の中
と実よ告うくてし
いうく雲さんとうう 花 今古
つまめりうらん之 孟同 細此
さへの字ちてんの中を

よりぞおもなかりしよりあやしき姿かく
そ須ち来れる。みちろひにてくずよ人の家 何
ぞさうよけらんしもくへくもあるもじま
川絶ひそうひ川べき世川の御乃。象ま
ひろのうち須磨さすくも我すずくるし
けすくうよけうこゝろの用心とあう 孟 蓋是 河 窮屈之
家けふくふはあくましくそぞしげうふ
こゝろの気色よ。いとそうもとうつら
ちうてずずりめやうううさするやん
箋云 御風やいよ吹ちくんとひやう袖打ぬ
らしるさまするうこは。象よそれしごとく
さうさあつめまつり。ひくさあく暮よう。 孟 文のるく

あらかれより

浦風やいかにふ　孟　業の新　称さる雨風てるみてくつうゆう違んくとく　細　表らう云々

哢　寓言の哥也

仁王會　細　七難即滅の心にてかやうの所をとこるゝなり事也　哢同　河　仁王會とハ経曰講讀般若波羅蜜七難即滅七福即生萬姓安樂帝王歡喜　日月失度・客星失度・火雨風旱・悪賊謂之七難　仁王經ハ持統天皇ノ御宇ニ始テ渡來・本朝三月ニ被行仁王會ヲ例　天暦六年三月廿七日被臨時ニ行仁王會ヲ一代一度被行之哉

いとゞみぎはまさりぬべくかきくらす（孟　源の心也　花　源の心之）心ちし給ふ京にもこの雨風いとあやし（細　此御使の詞也）きもののさとしなりとて（禎異とて敷之）仁王會など（おこなはる）べしとなん聞え侍りし内に參り給上達部なども道とぢてまつりごともたえてなん侍るなどはかばかしうもあらずかたくなしうかたりなせど京の方のことゝ（源の心）おぼせばいぶかしうて御前にめし出てとはせ給ふたゞ例の雨のをやみなくふりて風はときどき吹い（細　是も此使の詞之）でつゝ日ごろになりはべるを例ならぬ（ことのヲハおどろき之）

ひかり　細　雷霰なとの事

ろや　哢　此さしハ周公の東征の時天象のさとし　河　毀諸善人故天降雹　金光明經　火雨雷電　日本紀貞元二　大唐徳宗皇帝ノ代貞元四年戊辰四月五日雹落大如弾ノ　長和二年三月雷鳴氷降大如梅

ことにおどろき侍るなりいとかくちのそこ（細　底ハ地の底まてとほる也）とほるばかりのひさめふりいかづちのしづまらぬことははべらざりきなどいみじき（河　幸）さまにおぢおどろきてをるかほのいとから（苦の心也）きにも心ぼそさまさりける（源の心）かくしつゝ世はつきぬべきにやとおぼさるゝにそのまたの日の暁より風いみじう吹塩たかうみちて浪の音あらきこといはほも山ものこるまじきけしきなりかみのなりひらめくさまさらにいはん方なくておちかゝりぬとおぼゆるに（細　ことばのみきこえけるよし）ある限りさかしき人なし（細　彼浦の人への言之）我はいかなるつみををかしてかくかなしき

あまりのあやまち
孟 源のらよ似たらの罪を
かりてとおもふとく
いろ〱のしてくら
河 青幣(アヲニキテ) 白幣(シラニキテ) 日本紀
みぬさの幣あり
まことの のうて
河 古語拾遺云至於盤余(イハレ)雅櫻(ワカサクラノ)朝(ニ)住吉明神顕(アラハレタマフ)矣
日本紀云浮(ウキ)濯(スヽク)於潮上(ニ)因(テ)以生(アレマス)神凡有九神其表(ウハ)筒男命(ツヽヲノミコト)中筒男命底(ソコ)筒男命三神鎮坐焉是即今ノ住吉明神矣
神功皇后廿一年辛丑住吉明神顕四所中南ノ杜衣通姫(ソトヲリヒメ) 同基后神功皇后にし
ち住吉明神ハ泉の舟とまりのあまへよ神功皇后新羅をうちたまふ時以テ紫ヲ為幣(ヌサ)也
とし地みかゝりけり
誰ことを住の人みしを津よかれ住のとづけるへとをあことりのふ るとまよ
細 源氏の寵ひしとをいかよかる世ゆ卿も世の孔をじハ志住ハぎらし人之雅徳湯郡あるべきことをめさきれとかく
孟 万人をやしなふひすふ而心のうらきに何としらうとれあやうよ天象顕よおるぞ積善餘慶ハあるきとくまてすのことりりやしく 河 古今
席よあまりめきこ而うけてこの後やしおのかみでながれ給ふさ而めでとの数にくもも山のかりくらしもがくありて
家ところれたうひと
孟 離家三四月落涙百千行

きめを見るらん。父母にもあひ見ず。かな
しきめこ(妻子)のかほをも見で。しぬべきことゝ
なげく。君は御心をしづめて。なにば(細 源ハ心つよくて長旅之)
かりのあやまちにてか。このなぎさに命
をばきはめんとつよう思しなせど。いと物
さはがしければ。いろ〱の幣帛さゝげさせ
給て。すみよしの神。ちかきさかひをしづ(細 此御神往還の舟をまもるらんの誓之)
めまもり給ふ。まことに跡をたれ給ふ神
ならばたすけ給へと。おほくの大願をた(細 供の人々世よをもはゞかゝざるこのよし)
て給ふ。をの〱みづからの命をばさる物に
てかゝる御身のまたなき例にしづみ給ひぬ
べきことのいみじうかなしき心をおこ
して。すこし物おぼゆるかぎりは身にかへてこの(源の御身は我身にかへて)
御身ひとつをすくひたてまつらんととよみて
もろごゑに仏神を念じ奉る。てい
わうのふかき宮にやしなはれ給ひていろ
〱のたのしみにおごり給ひしかどふかき
御うつくしみ大八洲にあまねくしづ(人をあはれみ給ふ事)
めるともがらをこそおほくうかべ給ひしか。
今何(あまた)のむくひにかこゝらよこさまなる波
風にはおぼれ給はん。天地ことはり給(孟 天地ちとことはり下)
へ。つみなくてつみにあたりつかさくらゐ
をとられ家をはなれさかひをさりて。
明くれやすきそらなくなげき給ふに。

左傳云公曰非王命不敢越境ヲ
くれしさめ給ふ人
ならんと云なり

おいての 大炊殿 新語也
細 巨燵屋 旧記ニ多ク大炊屋ト書之 雑会也 明 食をかしくむ
るなく
年よ多く出こそそ
孟 あらけと高もさ所
どうむつし 作 さしし
とよしそしとりや

細 公卿ハ非ス事ニ不越境とこそ そふはつきろこともうらくに
られより除の行徒の勢也上よ見るハ付たるひなるらんとの
くくすしきめ給さへて命つきすんとをすり
ハ前の世乃むくひか此世のをうしろ神ハ
こけおちしつるよ世し海ぞにそのられハ
やめさ海へしこやしろのうさよむらそ（住吉明神のさし）
さ海くの新をうそて又海の中乃龍王よ
ちけの神よちらよ新をくそ去給よいふへく
するろそかうしまするつで出る
らうよ出ちうりぬあの月のしみかりく（節）
らうハやけぬらうろさましねすくてお海
浪まよふくるのさかう大殿にあかりし
きやうかしきうてかふとらすく出こそ

そうくハすくと 孟 くらや
こけり 白 帰来獨秋自 欲見飛頭風定雲生 兎
柱嶺煒米雲似墨洞
庚春尽く水 挐天 郭有詩 細任
やけ給り 孟 李義王沈義年
元年十二月七日始壊清涼殿南一間ヲ用玄年當殿ニ改造之其東行南廊及ヒ属技書殿廊同改造之
そふこの人へのあとくそうし
ありつるしきまつそそあそ
とうろうしとみりゆりろ
くや 古 あはの京ふて
とうろうしるうともれ
りの中とびさらうありく

いてらうくしくかなくしくしらむてなく いう（孟）
つらみる出しずそのハ黒をとそりすう
やらみく月をくれよそりやらく風あ
あの海のありし去あり月しのひかりもを
ゆかよこれ出す前のいとめづらるらも
いとうつけすくてきんでんよりへし所
しなうんとそうよやけおりしきうとも
うとまりげよそこしの人のかくとどろかし
まかへるよそうをあたくともみ吹らうしてお（細 此雑舎とて殿とあり 給之）
見殿とおりしてうそくとしうびうりある
よ是ハ海のんぞしますそ出かりしめぐくれよ
いとんおそしうし月さして去海のらうくこ

捨の為まり　孟捨の為まれゝ
今けしゝ師やうの風
波雷雨のさめしもあり
やまくりまさきまへうり人も
ありしく

又すこひもうゝゝゝこと
孟浪人とよものゝゝ　師資
人とわれて来られハさまて
つよ人くこ追拂んぞの
しなり

ちなみ縁もかくくるよ。あすかり形こしとゝう
つる渡あくさと。紫の戸としあけて綿め
細 雑舎の紫の戸ハ源の性なりけりてあるき
おつしまむす。ちかきこせかりよ。すのくこゝろと
ちりうしゝきゆくされのくしゝちめがこ。
とやうくやとえうぐえてこゝう人今う泡し
あやうさあまじゝとなぐの。しうきく（お）
まろ所とそし。あけまう来りて嘆もこう
縁くぬこゝえとさうえづりあつるも。ひとめ
づしうすれどえとひもくしく浪ここの風
細 海士ことし
いまとうぐしやすぶてしかうハとう涸のありり
のりなり
てのちる所あまりしまししとのことけを
ちうるくぶうゑうとけあ縁。こて縁し

海よますす　細海よますす
神ハ徂者の命体をそう。
又為よ海の中れ総立方
の体まよ形立々世縁と
ま龍神そもあるぞ。
ある渡たよ用しやとあ
ひハ海き名く一住後の
泪ハ百會とうなり。又ハ百
重とちき　日本記　海あらし
ぶの汲のやまあひよ燒姫
のうくも我ハをしまろ
ゑ公任九品の中の下品
こゝうし　細 花鳥爾雅字
とうさくぬ何國のきのさく人
これ御國まくここれハ
てゝうらく
こ渡うておけしましこ後
是より源の裳よ相森
舞にとゝ人ありくへ此王世乃
ハのそもくの此あるき
此そとく

ワしんぼそしとひくぞさまろうるゆり
源 海よますをそこれまきけりようくらもと
ハしかのやぞとあひよこうすしくへうすめし。国緑ゆゑ
細上 詞よこし八念佛
よつりゆそつり風のさくとうよさそとひへい
細 花鳥ちらく
さうしうしじ縁よ名れバ。ふかもあらてそう
しまそれだくさしく実ハ対してやそし。源
ちまじろそ縁。くうじけるすさこかまし。所あ
細 きょうけなり新く
もバ。くでゞりりねまつるよ。こ渡うて地らし
細 うろうくハらの縁ハさうく
ましさ向るかしうらうあてゞ。おじろくゝわ
いろいてうやらの
やしさ所かほ物をるそしそて此ほ我と
あよ源ハおけそてぞうとく
つそ縁さとそ縁。徂者の体乃こゝちひ
叫ヘうつりきさ場く
ろ縁まるよこゝや。ふるそしきくこのうう
とさうねしの縁つゝ。いてしうあくして。の
源の黄んく

これさくいそぐるかりのく
むかひ 細 霧雲ハ壽通ニ
まのぞかれぐるに、みぐま
らでもあるべし 晩日

抄りしありけれハ
細 延喜の御門の天子まま
母宮にて給ふといひしうと
りてみても桃李をとも 晩日
海よそりかこきれのかり
死長恨哥に方士が楊
貴妃をもとめし時のす
ゑ上は碧落下ハ黄泉
といひつるごとし

（細 義中ニ候ふ所也）
しこゝろげにまさりあはれまさりめしこゝろみてこ
き海くるしきことのみおほく侍れば今
はこの浦ざとに男女や旅給はましとこそ
らしまへば、いとあはれまさりてとられ侍らん、（細 源の海をゆるべく）
いそぐるかりのくびをひかられ侍く
らねよめりし時やすみしとみかりし（細 御門の御左佐の時也）
うどそのつきおかしありければそめつて
と思ふ侍いとまなくて出て侍るさらず
あつれどいますこしきこえへまゐるむとゝろふま（細 源の少将上のうこ）
人ぐるこそぞをよつりるさまのかり、
いつぐつうしにまかれどもうつるそでよ
いりま萬まへこしおくまうりてかゝん。（細 源の海源の）

月のかほのみ 細 以下の句
ゆふ也杜子美が落月満屋梁
とよめるにかかりけり 晩 以下
詞妙也とぞ 杜詩 落月満
屋梁猶疑照顔色
師云杜子美李白を夢みて
し詩二首の内の一首の句
なり
しほのめ 細 海ニ入渚ニ
のぞみてとなげかしけるに
源の宰相のやう の事なれ
つくしけるほどにおもふ
こゝろにしみ入給ふべしとなり
にあるをじきにおぼえをさき
かぞひなきより孝心のい
ふな
うきぞかきつばた
晩 の左近の思ひなくは
又御門ををはしますに
らしとなり

いそぎのかりかなしとて、立さわぎぬ、あら
ぞくるしくて御ともの人々あはれとおもひ
けりあそびのげさの人まゐらば、人めすくて、月
のあかりをさがしくらして、夢のうちもまた
まどはれけるにかゝらして、空の雲のあはれ
にうれしくたゞし此ゆめゆらぬを思はせ
らで忘しう思ひつるまゝに海をも御のか
かれとぞさへるにことかきつのこゝろにげにおも
えるて待かくれし給はさめいのちつゞき
かへしつ侍らず、けりよりけりまゐると
あかれにおぼえ給ふらくそかりさかきも
まけりとおもふみのしう、られしき給

ゆめみもはつらへいとまをこし
細 須磨物語どもかけ給ふ
べきさまのことなり
大やうハ　おかしくらふるよ
雅文ハ絵しくつかみく
細 絵物から秋の夢をとらる
くのらく

人二三人つかう紙の
盃あさんあんを青によ
むかし源の涙へとうり
てまく

え給ふこと浪ろうしむねつとふらふらて中さ
なりはべりしようつのみしきことゝも
おもとれて、ゆめにも出つらへをいまはここ
しらぬ人なりぬるこゝろいぶをさるに文
やりつ給ふとこと、ゆかしさにねいりまへどもちら
よれめとおもえて嘆くことに物語りけるなり
きこゆるさひゆやうなる毎にもそての人二三人
づらひ給ふびのおもやうらりとさうしてく行るよ
人々はるんとえんへおもしの御うたされのう
こゝろはらのおもねしきひて急れゆすり
源氏絶えさるへひさまゆうて対面してことの
心よりかきさんといふらしこゝよおもとろこそて

くいまそ　細 あまりて知
良清か文し播ず
の国のるなりし僕也
盃とくいハなる人あり
得意とまし
まことよいそしか
細 むかしのこといひり
しとうかも師のえ上
のるすをいひよみひ
かぶりしるも

いかつかうちめの
細 三月一日上巳の事也
ちく人絵　自らの風
也 曙日

入道その娘のふかくいつそて、年比あつかひ
らひ給ふれどもさらしよいまくわあひう
らむかこと給ひて、ことなしたりそふそこ銭
ずまりはさそひさしうなり給めるとな
そのまゝかれよい、みかゝしきわりんこハ
須めく、なの御夢かしこしとおりしおもを
夢こともありてりやおんとのこまんてま
よいつそおもひうらさぞうりいぜうりつ
君浪の世よいつのるようふかるそでさかへん
と、いうろえぐさを、おくり、いぬかつりうち
のひろ夢まさ海こし物ありのくつけさ
らむつこし給しかぞ、さへじてきことく 信

十三日に　細 夢のつげなり
師 巳とゐしんにまゐり
よう日のうちに
しるしにみせよ
夢のうちへある日とも
としみて夢想ありしと也
いかめしき雨風いかづちの
細 人のさとしかんとせよ
なや　師 夢の告のごとくに
雨風雷電の裏あれども
入道まゐりて待の折なれ
上ゐへゆひてうく
此舟をまゐらせしとて
夢を信じて
細 故事不可勝計　曉 傅説
あなり　孟 史記殷本紀曰
帝武丁即位思復興殷
而未得其佐三年不言
世事決定於冢宰
以視國風武丁夜夢
得聖人名曰説以夢所
見視群臣百吏皆非
於是乃使百工営求之
野得説於傅険中見
於武丁武丁曰是也得而
与之語果聖人挙以為相
殷國大治武丁ハ高宗也
夢を信ずべく　細 説文あり
めでたき事也。又古注にも夢
によりて又今夜にいて
かもわざをはらひて
よの人のさて
細 世界にも雨風にかされ
てかしこの人ざくをなどを
言ひあらはしかぬること
まことの神のたすけにも
細 又至極真実の神慮にて
もあらばそれをそむくべき
こと也。ねがはしからん
うつゝの人乃
細 うつつの世の人の心さへ
そむきそれをきこしめす
をとこ　曉 現在の人の心に
さへ神の助をよもそむくべし
況よりつく人なりとも
神のたすけをそむかん
はかるべし。況や我身
のあやまちをさへとて

侍りしかば、十三日にあらたなる
しるし見せん。舟よそひまうけて、必雨風
やまばこの浦にをよせよとかねて
しめすことの侍りしかば、こころみに舟の
よそひをまうけて待侍しに、いかめしき雨風
いかづちのおどろかし侍りつれば、人のみか
どにも夢をしんじて国をたすくるたぐ
ひおほう侍りけるを、もちゐさせ給は
ぬまでも、このいましめの日をすぐさず
このよしをつげ申侍らんとて舟出し
侍つるに、あやしき風ほそう吹て
此浦につき侍ること、まことに神のしる
べたがはずなん。ここにもしろしめすことや
侍りつらんとてなん。いとはばかりおほく
侍れど、このよし申給へといふ。よしきよ
しのびやかにつたへ申す。君おぼしまはすに
夢うつつさまざましづかならず、さとしのやうなる
事どもを、こしかたゆくすゑ
おぼし合はせて、世の人のききつたへん後のそしり
もやすからざるべきをはばかりて、まことの
神のたすけにもあらんをそむくものならば
又これよりまさりて人わらはれ
なるめをや見ん。うつつの人の心だに
なほくるしく。はかなき事をも、つつみて

（傍注）十三日にあらたなるしるしを見せんと告しことを過さず也
（傍注）細 此風之明 此舟ちかくよせよといふ心
（傍注）細 こなたにも自然告などありしにや
（傍注）うつつの海の人
（傍注）くるしきの心也

又あつめたるよて八世よ好づきとゝ 師 次立の世の人の心をそいさんとしぐるよそむりんと
たゝしへたしもてきゝしの弥のさをおもむきおもむくを背きてあらんとぞ
おんと
えたるをさことを 細 辛苦のものをまてよしせぐく世をさいあさうる人すそて八何事のおもん
さぞとし 師 一説此句ハ齢まさりたる人の上よ云るを人八そろ〳〵るときもえ去抱されて
これよりよつひ 細 安住すそぐく又年齢まさりたる人よまさりすくうとゝ昔の分
又齢さけるへく行住もべきとし 孟要て人の子すまハ云さる人を云とし へせ

ひまをゆかしハくるゝ日くくとゝのまと
今ひとさはまさる人よハすびくゐてさぐひて
ゑんむけをしてきるべきさりのをすらゑらぞ
さそとゝおしとてそむりしのさう此人も
いひ当られけよりくいのちとさきハゆへまよ
みをさめ此限をとゝ何らし何さらゝのら
此わらのる我ハふくとそをふけさらまと
わしじ出めの中ゆをらくみりじ

ありぞきそよるの 嗛 不退有咎 老子経条 花 此ありぞくハ位を辞し身をもりぞくのんよハあり
ぞ只人の先をせむそとの 細 退ハ退休乃
まとを畢下りて人よもさ
がふんし
退よハありとも人よもてさ
ふんく人の義よもそむび
てらがふききなり
のちれわの名と 細 人の
らへき一旦の名をそ云 辞ハ
さうらしお てふくハおもひ
くてつし不よりりてかりさ
おさるもわらびハさし
さうつりすもらさきり
のぞく

れいこうりよりとさん
らく此逆への舟をとさせ
られしものらし 細 閑 波よ
のとあれつろ物を吹風の
係られさ塗の源舟
まなの名世 細 好風也 孟 者
騒の風と舟よ船をうらう喉
てとあり好風也 師 前
のとわさずんの風のあきれ
例のとこそう

しへおりつれハきくるよことゝと
さんと此りしてゆくへのまた云世界
まめやかしきさうまえのくさすりこれと新
のうちりとそこひとすり人のかはし
さび行末なる空の月日の処か
と古のことゝかゝ作かり
つゝねとさへの渡よ云何やうり
べききまよ作りらんやとのまつ
よろこびにこゝろりしとも
われ秋のあけをとねさきま
すれをそ例のゑてしさうつら
だうりしてすりぬきいの風のそよぞ

しるくにありしにつき蹟ぬ
私按 風土記云 雑波
高津の宮れ時ありしの
驛家駒手御井の楠
木をとりて舟につくるその
舟はなやきことはやふが
ごとし一かきに七波を走
りそそやありとその舟
をかづく 今案 明石浦
より出て飛ふかこと
その風土記のしこまるり

しらやうによりしにつきまねくさえひと（こ海のやさきに）
こるく続いることきのまくいへどあ代（細しのこよ）あや
しきやまでこゆるとのうろかなり（細入江の）海
のさ海げよいとこうことわりへ（細浅）えけう
みなりのこるんれねらひよそむきけり入江
のらうじまめらる所で海のつくるみも山
ぐれみと時くよつけてげうをさるまん
きなぎさのもまやどこるひとてなの
世れこしを生る海しつべき山れのつくに
いかめしきぶうを立て三味をこうすひと
のよれあうけよ林のさるそなきりおさめ
のそうれもらひつひべきいめのらくしぬ（稲倉の町也）

うだちじおらくとをろよつけらうこど
しらありて志あつめくらひこうし佃よ出ら
しこみでろむらもあらじいどろんべのやどよ
う川してもまをそれバこれを海のさら
ようろやもくおりしまも舟よられ車
よなりうつ程ど日やうくさしあが
アそて佃のつよこをまうらう花もよもれ
よまひのふうんちまて思ひこうえてま
川佃りしの神とうくおりとなるう月日
の光とにまよえなまりこうんち志てくい
とおとつうくしまうるまいしとろかなら
所のさ海とバさうくみともいえ川くう

日やうくとしわうりて
おこゆねさきふいでま（ひ）
てらひもうらかじくと
どれおやしき風など
ゆひしよ時てり
月日の光を
細入江の夏よみしこと
またまりあり若葉
よみてうらぐくとお
さう

月しろの池すみよる
細 浅戸と云り

あお船のやんとうきまく
ところくし
細 小山の良清の語る
どと申すき給しよぬ
いせろくげみといろり
まうれりし 細 前よ来
二条上の所後へ浅戸
にとく所しを只とめ
しよせうなひくく所思ゐす
と給ふ也 細
いひしさみちよ くぬ地
のそこともうそうれひ
おりいろろのきこめまく

あしらひころたへま立しそわし前栽ある
どの面構へもいへるぬ入江の面たなし思
よりくばなのいさりもくなりん之し八
うきがおのぶおどと云ひ月じろの池に海
あまりハこよなくあまうるよる所かし
所志所らひたどえすみそひて見まるる
ゆうき海なみじげるにおのやんだ たくみ
とてろくよことるしんでえんよせはゆ
きさ海ハよまろだ海をぞ云らるて
しれなき川出んて八京の所あそどもと
きうて給ぶ来わりしつひハゆかしき
じさくろよ出てうてゐぞしさめ給

とひしとや

むかしきたいのりの
細 御物語も隠密そ
し給也

うらくきくとしのひひ
師 王昌齢力 一封書寄数
行ノ帰ル とうろよんせ海し

みろとるききさ川とてあれをまよと海
まとろみをめしてきよおまれろろりのど
をゆれく給てつるを出ろまいさ所い
ののりしどをさゐんき所ぐよへ氏給の
所るをいたくしくひつとれをさくし入給
のまめづりよハめづくるとくまそぐれ
おき海みどくきて給ふ二条院のわされ
ぬしほどのたべろりハうきりやつき給つぞ
くらをきくをしのいひつくらて給
所気色る給てしわくりくもくいつれき
め頭涙をまりしてそつろおりさき海る
まハいまのつとえなひそえるくらくなのを

くるしさてもと
細 筑上の前源氏のまさき
よみてさり
くはかりつゝなかなかや
ゑさはかりつゝうきさまく
にて源は二つひ紫には
対面せさせやせと携そて
んくと思ひてとく
ゝらふと 細 牙言ある
面白しむまうも唄ふも
ちゝぬさくひなれど之
明 ちゝうぶろうしとハ知ね
ある人うちあひしんく
出る面白し 暁月
孟 もと弁のうらおもしへう
つられんれバ秋の人さ
まさきつめんて
ゑの中なれんちのとして
ちゝぬさくひとこゝろさる
さしまくばかりつゝ衰の
中なりけし人秋本人さも
思ひぬかるれば文言も
ひがしと思ひなんとし

内文とえよくこゝろく
細 さあれぬんくのそれか
なり
わきりもうわよ
孟 おもちりすりうきのあさん
かゝうし嵐風やうみ
霞みされつ
人しけさいとひハ
若ふよんたけうえ雨の
とうんは影ひよきむき
ろうとありしそて

みくしとそてきき給
細 着紫書 小山とて良清
聞語よりなり

ゆかりなれどゝゝしさもそしもの給ひ
しゆゝけのさるりしようきとうく出月つ
あくなるやとこうら明しきゝ雨ぐら
細 今一度あひえんかをむとなと 源氏の浪風のられん
うれつまはさしとられて
源 さるゝふともおもひやられ出てはきしう
ららうとちらよ浦つゝひしそ夢の中な
るかちのとしてさるそもぬ浦じいうるひ
がしと出浦しんとどきとうらしとをくさ
えびりまん思しもぞいとゝ雨浦しこ吹
そぞめあらとでこよかさすれなぐし給
細 人々古の言傳ともろこ
とんゝゝそてまうきのく古へよ紀
そげるうしつくさべうめり、とやうこえの

のぼりそしの気色、たゞ紙かくまとえよう
こ、おかりすりわまども分かうちあげる
思ひ須まはいとゝ心得そくて、わまれいとそ
やもまれなりしとゞ人しげさいとゝ人ハし
細 らまよりハまうりうと
給しうどうしと文こ雨こゝるよ衰わりこと
あくでよろ伊よ思ひづてすぐさまる。おろ
じの入道、さうひ川とあらうゝ雨。つそど
うちと雨しうる紙、そごこの娘ありうを
めでまづひさうなりきいとゝうさりゝつま
源氏へ戸出る事
さまぞとうくもしられん其女也ばらら
源の心
みもかりとらいきさ給しん多れいらく
思ひくなくて見んぐり初うしう、まさるべ

をこなひより外
さしもよろしからぬ世継
しりがほ [illegible] もたれ
[illegible]
[illegible] 細 引歌 [illegible]
後生の [illegible] 中も
[illegible]
[illegible]
[illegible]
盃入道のむすめを [illegible]
[illegible]

き契あるにやとおぼしながらなほかう
身をしづめたるほどはをこなひより外の
ことは思はじ都の人もたゞなるよりは
いひしにたがふとおぼさんも心はづかしうおぼ
さるれば気色だち給ふことなし事にふ
れて心ばせありさまなべてならずも
ありけるかなとゆかしうおぼされぬにしもあら
ずこゝにはかしこまりて身づからもをさ
をさまゐらずものへだゝりたるしもの屋に
さぶらふさるはあけくれ見たてまつらまほし
うあかず思ひきこえて思ふ心をかなへんと
仏神をいよいよねんじたてまつる

をこなひさらぼひ
細 やせくろみ衰へたり
花 勤行によりてやせ
さらぼひさらく
人のほどのあてはか
此入道大臣の子なる故
姓賤しからぬなり 貴
はかハ助字なり
いにしへのことゝも
老人なれば先代の事を
よく覚えて
よしづきたる
細 源ハ年来隙もなき
[illegible]
[illegible]
盃 [illegible]
も入道 [illegible]
[illegible]
[illegible]
細 [illegible]
して [illegible]

年は六十ばかりになりたれどいと
きよげにあらまほしうをこなひさら
ぼひて人のほどのあてはかなればにや
あらむうちひがみほれぼれしきことはあ
れどいにしへのことをもしりてものき
たなからずよしづきたることもまじ
れゝば昔物語などせさせて聞給ふ
にすこしつれづれのまぎれなり年
ごろおほやけわたくしの御いとまなくてさしも
きゝをき給はぬ世のふるごとゞもくづし
いでゝかゝる所をも人をも見ざ
らましかばさうざうしくやとまで興げう

かくハあれどきゆれど
此比ハ源ニ別れとも
とく細への〔庵〕のごく源のけ
まうさき海て
こゝそてとひしが
前にあとれたゞくせよ
てあどハたひしがのごく
得くまゝうなりて
孟き人ハ物と〔云〕ふや
うにハいられぬく
とするての人ごさとめや
ときハこうぬ世界
明石ハ京ぢかきれど文
田舎なればまのつるの乃
都人さへえてぬ所を
いふく
かゝ人もおりつれる
源とめぞ感ぜらるゝ
みなるきすゝる　孟 似め
いぬうと娘の〔心〕なく
さらるらハ物哀なり
一向〔心〕ひとりぬ中よ
てハ山とそめの〔仏〕みなく

ありと〔心〕ほどこゝろもあじなかりしかるれ
こゝもれどいとしろうらむなるらしさげ
まゐよさるそひしがけしめしうなり　孟 娘のまゝ
てもがやふところのおもふみとえへ
ら出あしぬとふけしありぬとしく
おとりひおはそてすげくらうしこもぞ　細 入庵のむすめのまゝ
しなんてのんぞまめやときこハこしぬ世界（せかい）
みじみもうら人もかりつゝらとこなり　物 娘乃左分にかへ
じまつけらく身の程をくれぐいと云ら　源ニ及かたくあんじ
まぞ云あしたがやさらのうくたひおろ
うみとさてみとふみげなきことりみとせ
みよじうかうりハ物哀なり。四月（ウヅキ）なり

四月ニなりぬ　孟 くびき
とりもて　細 入庵のまゝよ
て調進さらく
そゞろなりと〔心〕ませぐ
細 おもりけるうろわ
つひうれども人庵の
都もかゝふあかり〔中〕
とるなり孟 文哀の〔装束〕
末など〔用意〕し粧ふのまゝ
とおかしめせども入庵の庵
のあてさまおかしゆるそこ
京よりあらうるかな
れとつくひども
南風のおとつゞきされ
とゝうひ後也南勝て〔なす〕
なるべし、さよそつひ
まなん人ハあさと八南風
のをられぞ〔如〕くし
うるさの他なるよ
孟 比海の京れ出庵の池
よおりひとゝれさゝで

かりぬ、哀ゞ人のいさうぞくこ〔装〕かゝさ　〔心〕 勿論 衣食の〔実〕〔証〕
ひらるびとりしありさ海よきのがれまう
げよつゝつりいとおしむをいとおし　細 非分ぬ〔言〕之
うちぞわたりと〔心〕ほどをぞ人ざ庵のあく
まくむかゞりさうき庵のおそでなりよ〔要〕ぞ
しゆきしてこ後京よりをうらふうそう
まられとつくひだ、身をすくせ〔国〕かの
どやうるゆふづく夜よ海のとくかりる
くえてまうれるとさくされおひしかる
そろのいけおよむまゞくされまよいそん
うるそくこひしさことぶつさとるなく
則来るきこんかうしまて、しうてめれ〔申〕へり　忙しなるかや

あはとはるかにハ　細 躬恒が
哥に　あはぢにてあはと
はるかにみし月のちかき
こよひハ所からかも
此哥の詞をひかるべし。私
をよみ侍り
あはとみる　花 此哥のあハ
といふハ海のうへのあはれの
やうに淡路嶋のうかひ
あらはれて見ゆ。哀ハ雖無心
しや夕月夜の比などぞ
細 是ハあはの泡なるべし。
此さへの字ハ猶但などいふに
添せし時の詞さへ残りなさ
るのよし　嘆 あはとはるか
にハ海の泡のやうに淡路の
嶋のさしいひあらはさるゝ注
者のきこゆるべし。月の
あはれさへとあるべし
うれしといふ事と
細 琴の秘曲也　明 河花よ
り 廣陵散　河云晋嵆
康宿華陽亭弾琴夜

きやらるゝは、あはぢしまなりけり。あはと
はるかになどの給て
源
あはとみるあはぢのしまのあはれさへ
のこるくまなくすめるよの月。ひさしうて手ふれ
給はぬきんを、ふくろより取出給て
はかなくかきならし給へる御さまを見
たてまつる人もやすからず、あはれにかなしう思
ひあへり。くはうれうといふ手をあるかぎり
ひきすまし給へるに、かのをかべの家も、松
のひゞき、浪のおとにあひて、心ばせある
わかき人は身にしみて思ふべかめり。なにと
もきゝわくまじきこのもかのものしはふる

竟時樂士伶倫也。含授廣陵散。自是叔夜琴ノ名大震于世矣。花云 廣陵散琴ノ秘曲也
嵆康ヶ神人に逢て傳ふる曲也。此神人ハ昔伶倫變化也。稱 琴箋曰此曲家にありと也
しうんあるべし。上に浄蔵なとも因なる物のさまとりつくしおもへバ今源の氏
御ひとりにて弾し給ふなるべし
きまうひと　細 此いやしき人とかなるべし。その字濁れバ集りてひく人とひの字を入
てよむ。その字清てひの字を除てよむ。さる八年の老て皺なとある人也
を浜風とひきありく
細 面白くさうざうに浜也。俗
にいふる風を引也
くやうほうたゆみて
供養法也　花 三密六度
の行法也
後の世にねがひ侍る
花 極楽の發經寺兼乃
菩薩のなす　細 極楽世
界のなす也
をりくの御あそびも
孟 源の御心に両裏そ
のちいつれも懐旧也

ひどもゝ、すゞろはしくて、浜風をひ
きありく。入道もえたへで、くやう
ほうたゆみて、いそぎまいれり。さらに、そむ
きにし世の中も、とりかへし思ひ出ぬべく
侍り。後の世にねがひ侍る所のありさまも
思ふ給へやらるゝ夜のさまかなと、なく
なくめできこゆ。我御心にも、おりおり
の御あそび、その人かの人のことふえ
もしはこゑの出しさま、時々につけてよ

らうたしと思ふ人をも、のこりなく　細 ひとつの心のうちに思ひくらぶる也。おもひしらるゝことの多くて　ひさしくよにたゝずみて。愁者其吟悲。のみなり。曉中に思ひくらぶるもどかし

入道びはの法師
細 首ハ盲者琵琶をひきてわたるもの也
花 琵琶引わたる法師也。当時の盲目のごとし
小右記云召琵琶法師令弾琵琶給録云々
寛和元年七月十八日

さ海くいそう
細 源の思し給ひしにまし入道まゐりよそほひ師 つかひの様に語る

めでられ給ひしありさま。みかどよりは
じめ奉りて。もてかしづきあがめ奉り
給ひしを。人のうへも我御身のありさまも。おぼ
しいでられて。夢の心ちし給ふまゝにか
きならし給へるこゑも。心すごく聞ゆ。
ふる人はなみだもとゞめあへず。をかべにび
はさうのことゝりにやりて。入道びはの（入道の琵琶）
法しになりて。いとおかしうめづらしき（細 琵琶引まねして）
手ひとつふたつひきいでたり。さうの御こと（さうのことを）
まゐりたれば。すこしひき給ふも。さま〴〵（孟 源の箏のことも上手也）
いみじうのみ思ひきこえたり。いとさしもきこ（地）
えぬ物のねだに。おりからこそはまさる

いとゞしうゆかしうおぼしや
ひとしもきゝしね　細 万事かはりたる中の物なり　師 さしもきこえぬ人の引物もおもしろき
ざりけるよりもまさるを也
細 冨月の御京気の面白さをおぼし出せるなるべし
すく春秋の花紅葉
きうへよ 定家卿 見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕くれと
よりよまれたる心深き事也
たが門さして　細 たゝく音
よそにてくひなの音きかば誰が門さしてと
らん 花 くひなのうちたゝき
をきゝて誰が門さしてといふに感じてあはれに
思ひやりたる也
いかゞおもひて誰をかおもふらん
入道はあいなく
孟 我もとめのことなどを
せうそこなり

物なるを。はる〴〵と物のとゞこほりなき海づらなるに
なか〳〵春秋の花紅葉の（細 是月の御京気の面白さをおぼし出せるなるべし）
さかりなるよりは。たゞそこはかとなう
しげれるかげどもなまめかしきに。くひなの
うちたゝきたるは。たが門さしてと
あはれにおぼゆ。ねもいと二なう
いづることどもを。いとなつかしうひき（入道）
ならしたるも。御心とまりて。これは
女のなつかしきさまにてしどけなう（細 源の詞 箏の事也　孟 箏は女の引物）
ひきたるこそ。おかしけれと（源）
おほかたにの給ふを。入道はあいなく（源の給ふ）
うちゑみて。あそばすより。なつかしき

延喜乃御てより箏琵琶の御手をひき 細 河海抄 可然代ハ七代なれど血脈三代とぞいふ

河 箏相承事

宇多院—時平 本院—延喜帝
金婦 伊勢
於延喜之世 傳之奉 伊勢
授宇多院云云
勤子内親王 第四公主
寛頼 小野宮—村上天皇

或人頼云基雅院を天暦よりの御門に准ずといへり。延喜より後とくだり代をへて明石入道延喜の御門より代々へおしはかりて三代とは…や。着云ふ源氏の御門の世をとも孫子なりぬべき也。わが大王とは親王を…とぞいへり

くちをしうこそ。あそばすよりなつかしきさまなるハいづこのか侍らん。なにがし延喜の御てよりひきつたへたる事三代になんなり侍ぬるを。かうつたなき身にて。このよのことハすてわすれ侍ぬるを。ものゝせちにいぶせきをり〳〵ハかきならし侍しを。あやしうまねぶものゝ侍こそ。じねんにかの前大王の御てにかよひて侍れ。山ぶしのひが耳に。松風をきゝわたし侍るにやあらん。いかでこれしのびてきこしめさせてしがなと聞ゆるまゝに。うちわなゝきて。なみだおとすべかめり。君

三代なれどや。況治世も已二代也。是数わるべけれども王 細 一本前王とある也。前大王とハ親王をさして延喜の帝の御孫なれば親王とぞ傳奉るを…入道の御也

山ぶしの 入道が身をさしていふ也 河 山伏世所とへて世をのがれて山林に入を…山伏よりうかゞす 細 松風に耳なれたる山ぶしのひが耳なれば…源氏の君へ…ハ…法師 松風をきゝし…の御ての事…琴をきゝて入道の…

ことゝもきこしめすまじかりけるあたりにね たきわざかなとて。おしやり給ふに。あやし う昔より箏ハ女なんひきとる物なりけ る。さがの御つたへにて。女五の宮さる世 の上手にものし給ひけるを。その御すぢにて とりたてゝつたふる人なし。すべて

女五宮 河 嵯峨天皇 女五宮繁子 母ハ交野氏久女 日公主箏事如血脈

女五宮 細 繁子のこと也…嵯峨の御門の女五宮の…源氏の物語に…女五宮のことはなけれども…也。但血脈ハすこしかはりて不載…人数にはりけり

さき人〻めてをと
細 徒然てんかくしにたへぬ
時てえるくし
何となくの御心帯ま
是ゆくもきこしめさせ
とけり

あき人の 細 琵琶ひく
叶り。商人の妻ろどの
ひさうどもきてあや
を人のあいしく 明 樂
をうけしと引くい
ゆく 河 長安倡家女嘗学琵琶於穆曹二善才年長色衰委身為商人婦 在琵琶引 白楽天江州の司馬に左遷せられて潯陽の江にて

いまよに名とれる人〻かきなでの
心やりばかりにのみあるを。こゝにかう
ひきこめ給へりける。いとけうありける
ことかな。いかでかはきくべきとの給ふにき
こしめさんに何のはゞかりか侍らん。
御まへにめしても。あき人の中にてだに
こそ。ふることきゝはやす人は侍りけれ。び
はなん。まことのねをひきしづむる人
いにしへもかたう侍りしを。をさ〳〵とゞこほ
ることなう。なつかしき手など。すぢことに
なん。いかでたどるにかはべらん。あらき

琵琶を弾ずるを聞て錚々然として京都の声ありしかれば 我従去年辞帝京謫居臥病潯陽城潯陽地僻無音楽終歳不聞糸竹声今夜聞君琵琶語如聴仙楽耳暫明とそあり 今はそれをとらへていへり 花 有此字 文集の琵琶引ハ白楽天
ぐされて江州の司馬となれる時の事也 源氏もすまの浦より明石へうつりて
られしかば その比巴ひくる女へあき人のめなれる物がたりをおもひよせて
らしハ来てとふる也 明石の入道が娘をばあき人のめにたとへて入道ハ
筆のよそといひなしたり これより又明石の比巴をもまさりしとや入道のあき人の
ることいひ出たり 上を結し下をひらきて聞く也

ひとへに 細 以結句生段の御心あるよみなしの筆法也
いまよりなよし入たに源よりはなれし
世の琵琶 細 よく弱和なる所を求也 むかしのまゝの手をいふ也
たどる 細 すゞしき也 孟 教青

まへられながら。かきつむるもののなげかし
さ。まぎるゝをり〳〵も侍り。などすいたれ 嗟 源の心
ば。をかしとおぼして。さうの琴とり 細 入たにひくせんのはらく
かへて給はせたり。げにいとすぐしてかい
ひきたり。いまの世にきこえぬすぢひき 細 古めきたるべし
つけて。手づかひいといたうからめき。ゆ 孟 手仕

いせの海ならねど
細 明石か上手にて伊勢の海をうたふ也
河 催馬楽に伊勢の海のうた
ここにはなぎさのしほが
ひによるなのりそやつまむ
かひやひろはんやたまやひ
ろはん
さけしひそし
細 そしハ数々の盃数をそしる
同 師 節奏きそ
注そ
まのがれりのさきはれ
ほうし極真といふも
かゝねどもに書本
漢字となよりて自
然と源も哀とし
かれたと見れあはれ入道も
此海よきまゝ給ふ
迷わんきなの心ぞと
せ

のみふかきをおもしろく。いせの海ならね
ど。きよきなぎさにかひやひろはんなど。声
よき人にうたはせて。我も時〳〵拍子
とりて。声うちそへ給ふを。琴ひきさしつゝ
めでゝきこゆ。御くだものなど。めづらしきさ
まにて参らせ。人〳〵に酒しひそしな
どして。おのづから物わすれしぬべき夜のさ
まなり。いたくふけゆくまゝに。浜風すゞ
しうて。月もいりがたになるまゝに。すみ
まさり。しづかなる程に。御物語のこりな
くきこえて。この浦にすみはじめしころの
心づかひ。のちの世つとむるさま。かきくづし

ことわりがたきこと
細 入道もあはれにしか
のことゝかり
我身にしかしながら世
まかり
さられよりてもまた
住吉の神の御利生と
入道の心とく 細 ゆゑとめ
十八年より
年十八年より八年まけ
よるべきも神を頼とさ
てはじめよりと年ま
て十八年になりぬべし
明石の女は年頃は山
住居不審 何故渡り家
王十八年にてあるべし
さなりや。その中へハ若紫
書にこそ良清か物語の時代
この国司などなりしを
しりたるといふ今十八年
ならば其のころも九年の如
べし又年の不同もあるべし

きこえて。このむすめのありさま。とはずがたり
にきこゆ。をかしきものゝ。さすがにあはれと
きゝ給ふふしもあり。入道。いと取申がたき
ことなれど。我君。かうおぼえなき世界に。
かりにてもうつろひおはしましたるは。も
し年ごろおいほうしのいのり申侍る神
仏のあはれびおはしまして。しばし
のほど。御心をもなやましたてまつるにやと
なん思う給ふる。その故は。住吉の
神をたのみはじめたてまつりて。此十八年になり侍
りぬ。めのわらはのいときなう侍りしより思ふ
心侍りて。としごとの春秋ごとに。かならず

こゝろや
あまたゝびのいとまあらう
偽しまり　盃入道殿を
めのいとまゝうさはまり
任意へ行きうかぐまで
ひかまりの六時のつとめ
が入道の後世のつとめ也
六時ハ晨朝日中日没初
夜中夜後夜をいふ

つぐくさの　細注也
此入道ハ入道のまへにて
うらんじ出家あるを辞し
て隠居せよ以て後ハ彼
ほうてらしら此りしき
許かなうぞうらるす
也それでどとらゆ
うじいるり身まなん
ぞとく

うきまつらしれん仏ものかなしまの六時の
つとめよぶつしのまらずのふへのめぐみ
をばさゝりのそでにみへとふるきに
いうれへまんとるん念仏をきゝのもれ
数つるすこそくらかりき山がいとこ
なり候ふかやむ人倍のくるをすてゝから
きかりさぶつしくるなる国とる
つてるべうつぐくさのまゝゆうきりん
ハ仰の身よりかたらぬ人とられしくせひ
仰をこれもしまれし何もりきのひ要
ん候らいかめして紙のしらき人よきまん
とたよいゆきをまうゝはぐくようけ

あまさの人のそねくし
光若葉の主に世くの国
のづきうでに仍らんぐ人
をれどもさうにうけひ
さぞしあらむあまさの
人のそうゐくと申つくこ
れと名り細作と此国
のなより下るとちつてよ
も領依なりしこと
也良清なぐして此動也

あまさの人乃そねくなくひるのよめから
きめ後みなおりくも此がく候れどさ
らまふりしことぞすひまへんどゝ今此
ぎりハをばさ神みもそくて候するのく
あぐしるえそ候なハ海の中にもまづ
さらせねとるん此まそ候かなどもそべく
まめおぐゝまあらぬことくも代らなき
くらこも為こゝのかき改く瑞河づ
らぬうしいしらるぞくそつくきてし
めそくこ海のつとよあきりて六かぬ
な世界よこでよふもなまのつとふりと
此がつかすくせひつる紙こまひのれりのぐる

くりごとよ
細川の入道の娘よ 若君か
がやかさ世界よりうりそ
もとのうひかりしまさう
ハかり 年比老法師のいのり
神仏神のあはれミ
かりしましく老げのぞく
渉んとするなやかしまう
よやとしさつる娘どもく
さうくめと八のまへ
いかうへひとく
細川よおかりしろ身よ
くゆれどもと界下し
ての百ふく 盃 我身の
ごとき流人と いと源の
界下の娘く

アよくもくと哀よなんかとかくくさこ
るよをひとり給けりしと思ひ出てハつげ
給ハざりしんこやこともられしとこちら
このつねるさもわらさるうもとこなひ
よりかのこるすて月日とめうよこころ
もられくりかねまかりうへりのしる給
とへりのさしなげしうくべたハゆし
きりのよてそかりひとそまふめしと地も
ひらしつるまさしもこうちさまうべこさよ
しきのまれん阿そさきうりねのなぐさ
めみともとのまいたるうなくられしと
ゆりつり

ひとりはハ細入道の手なり
ならすくよりもはるかのひく
アはたどハなへりくしろう
と女のこよとうへよせ
より帥 源の出ひより計
そば方の使もとの思
ひあうをさがひくさを言志
やくとしをかへりなぞと云
ぜてよかり
まして年月出まへまそう
源氏の出のひよりはハかりそ
めのことまうしとヘハへの答
ひとめとをそひふぶよふ盆
ゆせ
されはうくうかれさらんへハ
入道の娘ととけて書つく
れね藤ハハかしてとのをを
のさまうんとしそく花うろ
れさらとハ年ろしく聞よ
須訓よりへハ娘の君を
今さらめてとうやらふで
あうまどまうとし
藤家 細 我ハ藤の身まれ
ぜ一入の出しとめあらる

入道
云よりねハもとらりぬやつれぐくと地も
ひめしの顔さびしさ我ありてをし月出る涙
へるとらりふせさ我がしるうをあ しさうこゆ
あげてびうらるすくうそれとますがみ
ゆんなうくさされどとくしらかれさハんひと
そとそ
源方
藤家うくられしさるまするね君の花、
君もひとどもとうらうれまへるれさ涌
しいらぞあいざうつうらふうしるされけそ
ひるうらどもしぬことざれ嘆し川らしされ
どうりさしやひうしくども行うさぶしされ
いとどかこまりくるすしき入道のころごらん

潮干備君初来客海味只甘久佳人のかほ酒まつきハ花をまたる花鳥よかるかりと
給恋ア

ひかりとハ只ならぬことをかられハ　入道のひがらするべくさのはにひろけりまじまにきまし
されバけしき入道のかほくかを多しくらさるよきこゆべきこさの人

とおしもれめべかめり松よとく行けかる　細入道の心中に
ひめるかしてもどきうちひかくるそう
細原の文に
まこの目れ分りつきこともくまハれかもつきそく　細原の文に
もこちとろりしきこ海なあるまおりく　孟田舎よりて
あるもろまりしきたる
うろりの心個まぞ心のおかりしもこ
りうへかめりとこらのりひしまそこまれ
かのこ文のうきまえすとぞ分きつくろ
ひくめ
源氏
とりしりこともくぬ雲ねまおさわりまひり

こまかりこ文のこと
孟言簾録也かさしくまいらう
さなく出て落君文字
然しは拾遺の個出る
かくしのおのこにきこと
わからに帰　細
とらうらも　原ハ其入道
のどこへのおくおかりぞく
どうてとも分別もなき
よくし孟　源の娘て生と
めのくこへのとくいづくた
そくねども入道のとしま
まらせてよく
出家ハ　細老人よハ年きろ
わが是ひりの代
こぬとうりまもうらんハ
入道の末居ると源の皮
の知ろらく

いとまりしこきハ　細
ならり師いとをりしこ　条有
こきと心深の人のろてあ
なことしとそく
すりしまつくし　ひとめ
ふと権帯とりていよ通
細これしこを何よつきまん
かく衣のあしより来り孟
しこきと何よつきんうう　娘
衣被ゆこうまさそとそ
まりしと
きこしにえまかもとひ　細
娘ハ

なやかりけん入道も人をれどもまちらそこし　細文を始く
よそふの家よきみけりりつまもありまれバ　世迄の家之
れつひいしまバゆきさまく思ひすれ　細郷良應まちく
まりてひさしらよりてそくのかせど　娘の近くす住れど入道のそくのひとと
ひそめはまよりん　れどもうしげなる　酒ありろるへし
れあみまき海よさしぞんまつるもあ　明石の人
うちつおりうへの心指こる多れ明と
せあるこよるてからおしとそこりふ　あの外にうけあるねえ
なきひとくひく入道ぞうくいともりしこされ
ぬかりひく行く分りしようつくこわかり
ぬかりやさし〻○このもとびるてね
くしこさるまかんきうは　かまれかさはら人入道ゆとすきろきしとてかくろ細く

せりふもちらす也 師 あらう事さ御無用にて候 さりとておしかけてくるとも ひめハもとより
なみも及び候ハねど それに付とても いかゞ入道殿も候はゞいかにせん 入道が御前まで
参らすとも申まじく候 師 さらぬていにてすごすかくてハ入道むすめの
ゆくゑ 孟 方へうけてみるべし 師 さりとてもあらかじめ伺ふべし
かゝる所にいらせ給ひ候とも 仏さまへもはゞかりあり 候
こそ見すかされ 方へうけさせ給ふ 嘆花などのかくれ御かたり 曉けかたとなりぬ
かくて御座をまうけ 給ふ 出ありてこゝよりつれても又たまりて人々
ことなるべし と まくら
まづむすめ手かし 細 源の
おもひもしらぬためも同じ也
なふらんとし つかさ
ふかく師上らの人ハ源の方
よそへね雲ゐよ添ひび
とおりとをりてそこに
おがみおくらんかし雲
ねどころさへ御分かと
とうへんみまつり 入道が娘の
心がくれと見ゆるとし
きゝぐしや 細 入道のを
しつりて申ことをきく
しきとく 河 檀紙
ちらのくまくよ 奥列しり遠視く
のふく 細 女の装束なれども 農を藻は
入道

はづかしや 入道 さらぬていにせんにもかなはねば
まよひまよひ 入道先縁なれども うらめしさに源の心すぐしやと答へければ 又かくて
きゝうらめしくどもかなしみとおもひけるにも 給ひ
とうかなりし声 かうしもうらむ心にも 涙
ざしけるとすずしくそうれどもいとしい
れつもしいけるとなくなるにまことかぞ
づけさせきの日をしぐまぎ入ハみち

物あまたか 細 後撰 黒主 かくその事とそしりこんとせられ
そうら河表 細 源ようつりて給へ はじめて所書せ 孟 宣旨書也 しかしか
ぜんじぐらさえ 入道まかりてのきかな
と入道出しるそのまかく
りがぜくも めづらしき人
かれしてさきをきく
師やらやとハ 心かさひ
くあそちのかはらや
まいりよ物そおりしとふ
人もあるればそれぞれ
かるよおひもすむとも
りひそぐ 孟 一条院御製
劔しとしきごみぬ人の
いひつめくるよ物の年げ
うらきうる 細 かぐこと
あそびハいと
かふの文ハ艶書らして
手紙也 嘆花の嫁入る時ハ事まもひ
いら術ありて御費を出棺く
まづらひまつぬる方の
細 こゝ ひまくハそへども秋
方お無せさふしく卑下
しら也

源吾
いぶせくもこころよまのむやむくれやよ
やいつまとそふ人もかなといひかくてとこれさ
びしいといとらうすびらからうとおもふまいと
孟 ふそくき紙とふを
あれうげにくさまかりもちさんのめでざ
茶の詩を
らんもいとあはりむまれいでさうらんめぐく
孟 娘の心
うしとへられどあすもしひすゝぬ身のかざ
のいえじきりひまかれハおくまにあるを
のとらねきか結ほつけく 涸くやれく
河動あるき 師 恐る事あさまへくるあぬらく
さくるよ倒のどうすさ我をめてはれて

ものかん　お源の光君かゝ
のおかいつるすり見えうりさ
しらされとおもこうるさこわ
御祭られんこくし又源の
おかりかもとゝの御いるすう
そ何ても北かりめすすれ
きこしえあぜまあれがまり
きうふべきうかうちむむまま
じきるせともれようくれ
味しくべし細　源の心をむ
らぶうよしひがことの名
とさしけくいくて下の名源
のいかざこもし給ぞ没
むきゃくもし給ひのうく
一日も給後下もせぬしく
なまふぞくりてとゐ君を
也花源氏の名女の更衣
こゝよ一条院の御製を
むくるよ似くりとさえ
ぬんといは上の数多給
はまかるや又説上二句は
く数多しぬ月よりれ

わうくらでそらうさかのうくよ
をもづきうくもくまゝうりして
人のものちやまかんてのこら海
あじやんごとあさひとよいくしとき
しうざでめきうり京のこと北わくてお
うしとまへどしもうりてつくさし
もんめでまれば二三日ついでにつかはし
ぞくなる人の子の家にて明石の
なじやうよまぶつしてもかくひとも
ありじもまでめべきほどしつり
しうきうろ給はかげありしん心らうり

源の心をはのかしはさうしいかに源氏の名をさりと仰せしもつくろさやうし
かひてかゝんいのかるやめよいか
源しんかやうなしぬ身なりと女の身と罪下くる
京のけ　細　といへやうなる事もあひ離れしと書しに京とある源の
一重くたり名なれ　細　心の西日しく人も見えり名べき名とかりてと源の何かゆるま
けつらめ氏の心づかひのこと第ま老母定めも物かしりきの給ひかあるん名く
れなどあり
ろきのそしかうよかりゆるしと
ひとゝろ思ふべしかもかしげしと女の品ありしんといわうりうゆへ源の心は
對してものげなきよあらんとこ
かくいはのひのかり　ゆえる
男とおひかあかりうかり
めのまへはあひきくん
細　良清の名物のやうに
物狂かしに今日の新
よいは何かしてひへえ
とおかりとせ
きうこいみてしも
心なのかいうせうりみく
うすきあしとりよし
ありきつうんとれ
おりめせとしもとし
みへあつく　細　心むきあの
源のかみぞうるのまいは
むこつと名なよかつべきや

かくまかりわづらひゐるこそいやしけれ
源の心
じと北かりとこそのうちぞうしきてよからう
うかゝけしすゝ黒よとあり
ざくいひし名もめぐり海ぞうゝ年ころ
づけるあんをめのまへゐりひさうくん
をいと北しうぼしめぐさうれてん
うりすこそてあらせわかし
そあつくいはさうすてもあらゝまさし
てんと北思ひとゝ女ささきちりやんごと

細　湯孟　又ぞえ
鎮明石上
孟　入道のうさ
細　孟白ひく
明石上をも云も上の由まへかも云
上臈しきし
源ん心

言のうすとうせさきつぶらり
てい 細 源氏より出らうへのかう
ま給らくせさせつれバまし
さられよりしく思ひさかる
心をさべし
花 りうまもてこも
細 紫上を思しくとも也
かくわかやしとゝげそくわ
ひとびたりうまもてさ
まで思ひ忘しき
こうともうとてやハ
かくるすゝ御ことも思さん
捕そしおがらそし
ことの心にみし
（まうさるゝそやハ
今かの御代にも紫上とも
へなし人月ありとさるを
忠あきらしとく

三月十三日
細 とりまきて怪異お
ゐ也。源氏ゆくへの雨風
の御れる也。

かれこそハのんしうといふらうひあがり
て。ねびすけまりてすこしあやしきれバなくさ
べしめくぞすぐさせ。家のこし残くるさん
じらてハいみじく思ひつるすに思ひなさ
え給ていつまにせまりしにこそかれはくさと
あらむれ。いのひてやむらくもれてむしと
物しうくるあるくあれどさりともかう
くてやえしもとうこうへいまさし入
よろこことをやハしなかりしもかめそひ。その
とし世かや公に。ものゝさとしへくきりて
ものさはがしきことおほかり。三月十三日。
いかづちなりひらめき。雨風さはかしき夜。

みかどの御夢よ
源氏すまにて院の見えまひしと
同しやうに故院を帝の
見まつりし 河
耶䏿 ニラム 日本紀 睞 ニラム 文選 盻 ニラム 遊仙窟
御けしきいとあしうにらミきこえさせ給ふとなり
よ計りくりり 細 河海
晴五日の風十日の雨
六夢乃さまあり 河 周公
解夢書 日周礼 六夢
一日正夢 二日悪夢
三日思夢 四日寤夢
五日喜夢 六日懼夢
此内無風雨二夜無変故 酔之時亦同為正夢ト云々
御目わづらひ給て
細 花鳥 三条院の御事を思ひ
花 朱雀院の御目わづらひ
給ふハ三条院の天皇の御
め時マに見えぬ霊のよ
ておはさいみとらうらい
るをにそせきり花鳥
ちらみも見えも 孟 内裏考

みかどの御夢に。院のみかど。御まへのみは
しのもとにたゝせ給て。御気色
いとあしうて。にらみきこえさせ給を。かしこまりて
おはします。聞えさせ給ことゞも
おほかり。源氏の御ことなりけんかし。いと
おそろしう。いとおしとおぼして。きさきに
聞えさせ給ければ。雨など降
空みだれたる夜ハ。思ひなしなることハさぞ侍る。
かろがろしきやうに。おぼしおどろくまじき
ことゝ聞え給。にらみ給しに。目見あはせ
給ふと見しけにや。御目わづらひ
て。たへがたうなやみ給。御つゝしみ

弘徽殿の細之ハ大后
なり
あかきさましく　細 二条太政大臣
臣也弘徽殿の父也太政大臣
に侍し給ふるみてども但
前のことあり一年ありしら
やうらく　暁 悪太臣也弟
に侍ば給ならへし　孟曰
ありとこの源氏　孟 氏あく
とぶらひいふやうあるす
もあらんと法門の法
ふく師 朱雀の法師く

三とせぞぶるま　細 悪右
のがく花為次可哀
明流移の人大載ふく海
洛ゐ三我かくゆるさる

ゆも変ぬ御ゆるさるべきよし世給ぬあな
ここちしらふを給ぬいしりの中にもひ
すれど、つぎてくるまをの川うれしさはがしき（二条のおとゞの御子の后のいせうあるや）
こしわうにちやとそこにうしあうま
づくひまて給かれいまつり給やうかう
内よ此所しなげくしき海々なりあ弘
これ源氏ましぬ海てるまとそすくしなさ（至罪なく）
もぐくちぬむすうばふすいにうのむく
ひありなんとうん此所ぞさかふいまには弘
りとのらぬをもまひてんとさびく此所（孟 此事うろく）
しの給を世のりぶくこあかゝこやう御（細 大后の申給之）
しつくるはゆらそがんやもさらしし人ゆどこ之とせ

よゐまれバ三とせぞぶみかくの給くゝ花　今案の獄令云凡流移人至配所六載以後聴仕本郷
本犯不応流而特配流者三載以後聴仕　今案流移の人とハ流罪せられる人をいふぞ
且ハ六年の後ハ公役にしたがふべしとゆるさるゝ流罪のともがらはいまだ源氏君ハあらはれ
流されしにあらず三年のはつまでとゆるされ
ともなくて除名せられ給ふ。ゆへしくハ六年ともなくハ三年して出仕あるべきにや
三年ともおもはずとおもふ。又赦よ二あり。常赦とこハ八虐の罪をハのぞき
てそのほかをゆるすをいふ。又大赦とこハ八虐以下の常赦のぞく
ほどのつみもゆるさるゝといふ。これハ人ものあるべく
ゆるされたるにてこそ。さればかくてはゆるさるれど
よ源氏三年まででとゞまる。赦免よりもつて御門のみこゝろを
うごかさるべし　細 律第一名例第三云凡除名官位勲位悉除課役従本色六載之
後聴叙免官者三載之後降先位一等叙唐律注除名者官爵悉除課役従本色
也免官者免所居官云大略是今源氏ハ除名ともハ免官ともさだまらず
人也されバ免官なりとも三年をさしもとさだまりし事也ともおなじ
八令を引く徒罪のことを申されけり律ハよろしく叶へり

此所やうとも
朱雀の御かやうに大后の法
師もなり

どぶまもぐふすゆるされんとしたまふの人
をいふぞいひつてたまはんあまじ后のうら
いかめ給よ此所朱雀之もしろぐ我妃ぞよ月日のさ
ありてはるやうこどもさ海ぐくまとそり
まさらせまふあつしよハ別のあつくハた海

こゝろあはせよと
細 こゝろある人とかやと者
こゝろえ
いとけなきおやのむすめ人
こそうまるゝうる人の
細 一任四ヶ年の人うじの人
よるうらひつて事ハや
しき物なごこそおうりて
まで仰れとく
人つらこふも世かされざらん
うけゆく　細 自然津まて
いすらてハみすら盃やぞそ
持うてハとかう
ごめりて　河 世よまうらぞ
錦の房くらし　細 世中みも
まどりさるはさしとそと
こ一度も人よえて仰ては
まかうことたくしてハ釈

ゆのごとくなるよ。ひとりねにはまりやうしよの（彼御上とそれうけし初之）
まびきうて入たるよもありくらうしてせ
絡めうりまうしつてこゝちあはせてよ
との絡く。まうり絡けんことゝへおかまし（使り罷過一ハかけとまとらえ）
うれしう絵さうじしつきさうにせひ（細 此むせわし）
こ川べくもあゆとも、いとくちおしきてハ（御上の身とそひおかえてえうらし）
のぬなきらん〳〵そうりよそうりなく人成う
ちとけごとはつきそさうはうくるかな
うつふまし絃をとまれは、人をそよもし。お
がされざうんりの衣。我ハいうじさりの思
ひとやそん。うとびすきらをせす
ゆゑしうあらよりうりてしくたてさ年月

盃 持しれさる時はやさら
のんでしうつきこと娘
のんく世絡つて年月を
まうてそくひらきころかう
もれるれとゝ　荻 世よて
りうきうとゝまどりうとき
みへのおさるさかどとも
世語とえそれハ二條の
ねよよせのうりうらずえ
ぐさくし
はうしにおつせん外て
源の論者の名文うまく
ゐとうひ出てさそるあ
人とく

してふびんさのそよめ来るらよく（細うひろきしのごとく）
そあゝめ。まちくらうらゝそやつてきんと出ひ
て。うじ出らしつよまはきんほどうつけ文
ぐらりとうきてうはなむしそとかゝる
ね。弁比寿よのこ愛でいつかけさる人乃（源の御うくと）
けありさ海をと。ほのうかとこをまうんなど。
くちゝよはりひさらしとうくはりいけ（たゞ返して此海よおかし）
ざうしけも海なまてはほすねどなの（さるるくとゝて）
うすもゝをまり。よるよなさき物ととつてつる下
けことのひとらも。風よつけてさてあけく
きのゆえ枕かおつるうしそで。かくまゝく（我の源よ三うれ）
まよあうものとおかしこ川めらあとて（まうしるやうに）

親たちハ 入道母君なとの心く源氏ニ娘をまいらせんハ年来の念願なれども御心の程ハ思ひはかりかたくいかゞあらんと思ひみだるゝ也うくハ思ひ給はぬものゆへ見せたてまつりてのちおぼしかずまへ給はずハいかゞならんと思ふ也

めでたき人と きこゆとも いかにめでたき人なりとも我むすめをかろく思ひ給はゞつらかるべしと也

うらへ〳〵 ものゝね
今ハ琴のねをきゝ給ハまほしき也

そのとしハおほやけにものゝさとし
さとししきりてものさはがしきこと
てつゆをたのむ(?)ことしハおもひよりて
たちハこゝらのとしころのいのりの
かなふべきを思ひながらゆくりかに見せ
たてまつりておぼしかずまへざらんときいかな
るなげきをかせんと思ひやるにゆゝしくて
めでたき人ときこゆともつらういみじ
うもあるべきかなめにも見えぬ仏神をたのみ
たてまつりて人の御心をもすくせをもしらで
などうちかへし思ひみだれたり
君ハこのころの浪のおとにかのものゝ
ねをきかばやさらずハかひなくこそなど
つねハの給ふ忍びてよろしき日みて母
君のとかく思ひわづらふを聞いれず
でしどもなどにだにしらせず心ひとつに
たちゐかゞやくばかりしつらひて十三日
の月乃花やかにさし出たるにたゞあた
ら夜のときこえたり君ハすきのさまや
とおぼせど御なをしたてまつりひきつくろひ
て夜ふかして出給ふ御車ハ二なくつくり
たれど所せしとて御馬にて出給ふこれ
みつなどばかりをさぶらはせ給ふやゝ
とをくいる所なりけり道のほどもよもの

(注)正身ハとりて 秋の比く 入道ハ娘の琴をきゝ入とハ 入道の吉日とえらびて 細 二イ 八月十三日也 孟 源の心を 細 あたら夜の月と花とを同じくハ 細 これみつの人さき と思ひ給也

三十

思ふどち見まほしき
細 思ふどちいざなひてゆかん
思ふ事は入江のそこに沈む
月かげ 弄
恋しき人の 細 紫上之事也
河并弄なとに寡ふかく乃
ゆかりにかくある人なら
ぬなり
秋の夜の 細 我へあくがれ
て出させ給ふ也 此詞
拾遺乃うたなりけりや
かく岡べのやどのるしを
ことさらつくりなどと此所
などとかく此詞の体
情あるさまと河が大かた
の月毛の駒もうらやむべし
とあらんとの心をとどま
つ所
いさゝか 細 心づくしさまを
河片脇痛まで法様しる
中島抱絶中此詞多し也
そなへて
あはれなる海へ
細 ひらぎりの体 女房どもの様の
海よ岳の子をすいおもむき
ことと師 前へのかたをさ
つくらんと明石上の事を
思やるへく
月いれたる槙の戸口 とを
けり 細 此詞殊勝と也
家も感じ給ふとなうく
見あらよみ給ふ河内本
かく書ことよとあり元
今案源とうして給ふなる
らんもさりてみゆべき
けるべし又あはれにと
ちらりてもをし給ふ
きこえさしきかりといふ
つるかなり 弄 能なると
既月花 定家卿の表紙
よいひしきこりとしの
ことかりとありかえ合
源氏と河海よつき
てやしきこれりと云ふ
源氏よ此戸口よりへら
せ給ふ人と云ふらん也

の浦々見わたし給ひて思ふどち見まほ
しき入江の月かげにもまづ恋しき人
の御ことを思ひ出できこえ給ふにやがて馬引
過ぎておもむきぬべくおぼす
源 秋の夜のつきげの駒よ我恋ふる
雲居をかけれ時の間も見むとうちひとりご
たれ給ふ造れるさまこぶかくいたき所まさ
りて見所ある住まひなり海のつらは
いかめしうおもしろく是は心ぼそく
住みたるさまここにゐて思ひのこす
ことはあらじとすらむと思しやらるるに
あはれなり三昧堂ちかくて鐘の声
松の風に響きあひて物悲しう岩に
お(生)ひたる松の根ざしも心ばへあ
るさまなり前栽どもに虫の声をつ
くしたりここかしこの有様など御覧
ずむすめすませたる方は心ことに
みがきて月いれたる槙の戸口けしき
ばかりおしあけたりうちやすらひ
何かとのたまふにもかうまでは見え
たてまつらじとふかう思ふにものなげ
かしうてうちとけぬ心ざまをこよなうも
人めかしきかなさしもあるまじき際の
人だにかばかり言ひよりぬればこころ

ことくくぐりあけゝれ共かゝるさまにてありしかバふりしもらす気色もなかりつゝへえ
られたり入てせめてもとさしくはしくとゞすめおもしろくあし毎段とりまえを
謂分さきまあはれ人の玉ぬよみさうさうべし此月入らう法の戸口ハ源氏第一の詞と立
家にハ申しおはしますや 細 源の思様しおさらんかたのきかりましく大若源の地の給へくま
こまあらうくへんめき
りくまでつまろる語かわらんハなりし物をとみがりとく
ひとくやられさらは
細 若男の足とてあげやまま
世さん此ゆへ入とて思合とて
盃ちうに旅の心かきこハ源の
さらにとあるづかりとく
ゆうぐは 細 源の詞く 盃 道
かくき申すよしそうこうべく
まましけてやさうんもいで
とせ
此うき地のひさらん 細 若地
せめん上ちらも今らと地
のんとおもいろ今ひとく
盃あらし秋のみどころ末
とうけてなみいちう葉
みの詞く
ちうき表しのひかまさうけと
細 のんと上奥さ母へ引入らう
ぞすしひさらしを。いとゝやられさらは。
めまつくらきあや　それくしきき御くま
細 源のんく盃まうかりてもにあらんとくに
思しなやめりあうきけるかしとしくひも。
ことのき御よしまへつきらくへまますけんこ
そ。へまりきれがぞれらしとま ふさ御。
げまりのもひきらん人まてそこらせ御ふ
きれちうき末了のひかまさうの柱と共に
副之丸様の組に筆のちら源にわらく
あきさるすしされさらも。かくひきどけす
くらけりけりがぞれよりに御さへかりけり

さり浜筆なども八度のれくつろさまるべし 明 女のもとう引入ちまちりて筆なども
のあり奥なりところのさまくを立てろくへし 明盃同 師 源のかりしころまちりて明心
上奥へ引入さちあしあるへし 細 事の字と琴してえうり笑ふしころとハ八席の網紫ちら
みさてありしく
しゆへし 盃 さんやなど
ちらげまの者とハ笑ひ
ちら振ること言うて世話ま
ドきやと源の組と
むかつごころと 細 源の言すり。
源の男とハ誠に紫若井
の如くかちへし。思人とり
うり合せるかく表のごと
くなん 男のこれ物思ひ
めんの此代おとけなさま
ともしなくさむへしとと。
と振るさらなくく
あけぬさらは 細 兵吾男も
若井とハいつまでと表とを
さくさるとなく
あまんかりまりく 細 今ヶ秋源
の御名できうしせいへ入た内く
もいひさりせざるへし
ゆくりの笑しぬは
かりひもうけきて源の名に
えてかりしなれハ。このきてあくししう白
こまさんやなしじきかりハのまふ
源右 ひつごとをつちあハちんひとをとゝれ
こ世の長もなりぞさもしやと
せめん上を云く
明ぬまよやうくまさへるんてはいつ道
盃 源くとおけらうさ安らう
をまとまりそてうらん源のるらけく
とまよあさきてさわらつきさし
ひいせのとやむ所よいとしより笑てさう。
此ゝんの言あく
あまごろもおすくうちとけるくみてさう
せう誠かうもの笑しぬまよいとまんまく
細 女まさらし奥ゑ入さうとう言
てちりくけるざうしのくちよいりて。

いかでかくさめけりまかいでつる紙 源と上空。
をみしらぬ海をぬき海たちされど
さのこともいりぐくはあらん。人ざ海いて
わくはそひえて。かた川りしきけん。公そ
ちうらうわみぢかなりけり葉と地湾
をみとおさうしぐ衣ちられさきし
のちりまさらりすりかなるべし。つねいにとく
しさ秋のあかきも。よく明めくむらを
まばく人よちられじと地湾をとしらへあ
そうてちうてこ海のようくてひとそすく
ぬすひぬ。かりきいとちのひくそゆかおさ
めひるきされいのこりよるありや。

細 今りハ尺にと思ひ小将

出くせんせバまくりかく女の
地りつる
されどさのこころいりそくは
おくん 細 なりそもぞ
こらさまりぬき海や
とかこそて小路を書し
うら西中にハつにしてある
ま同よ入さまふりし
花 おもひそて出うる秋と。
つぶその関もつらふらんさ
うつぬるるべし。山寺の月よ
たうくらり
人を海にとあてまさひくそ
細 河海説たやらなりとこ
め里兵人おうらひきて人
まうせなかぞうまハたときこ
こいつじとまきまく 眠 やそう
うまのこハなくとりしを
そうう竹よや
りうわるかりつ 細 源の心中
世の常世よりの契かく之抄治
广へ謫居のそでこひの所に此
御人おもしてえ入たの心中

つきハいそくりしき 細 舎人くの秋乃夜
河 古ありしても如りひぞそてぬせしらあふ人くの秋乃夜まれバ
仰せくらくと思ひうく 細 計所で八大方の御文之ぐかハ後朝の文されバ思ひもかく
あいめてされんの 花 悪心之 京のきくしうぐくと地まうくさひのきをいてう
ひけいのてくさもり
京のまことふとくてうぬ
よのつえひの後朝の御使ゐう
バ海がかなへるどもてきを
とおりかへて
めりくぐう 細 京のまを
えとくとうく源の例のを
さくあつまて 花 流儀のか
もちうる数寄をすすむ
とく妓のり入物のひをうる
きさ人のつひやかりさん
そらうら詫そでぞ後ハ思
べの高ハりんそうこしを
出さうれバうとおりそへめ
うりしるとくやしくらこ
そこうの所をしうへし 聖庭の
細 入は八源の所おを 聖庭の
和歌よりへいきるまかに待く

あそとういでまりさじとつくうそれつひ
ことくしくもまてあさぬなど。もねいでく
おりかくてのちいちのい川ぐおとつ 源
明じをしすうくるれしきまとのつくるあ
細 道之花之やさく入道之ミく
いひさげるさあかまのこりやさらおぞらんと。
味 源氏の例の古き思之
思てもちくるはなぞされバうともいるげさ
細 五ハ抄若よ後くかくといへり
まるとげよいろすらんと。入たも後はのね
ひそべきされくどくこの所にたきことを給
双紙の作之源よあり世ん申ことをといひて
こしよい源。今さうりまこう。ころもし
いさくせげるり。二条のきさん。風のつ
細 源の心中と 抄 思之

あふくしやてなきこともこひ
孟 なきこ戯事のみてもと
く船をこうしこ出びあり
こまりて下紫ようくくれ
すじどれ浅悔之
人のあり言申ともこみかよいか
明らとをあらまつけても
枕紫と出かもてうる之
まくくや　細 文の詞之
師一説ニまくしやしとハ思ふ
の詞之 我すかしくよ
くりれ文の詞し

てふきとおり出給ひんそこハさらぬかれぞそ
もゝ心の海ておりまうと、云ひうしぬれ等
らんハ心ぐりしうきぞうしうみかなろくこと、
わきがらなられぬかばし思ひ様すりつし、
細 紫上妹姉の方ハ心あつさようし
うらうさのことをいふまかよこゝろとめぞ
うしくきまりしかくなどそあやなさき
きそさひまよつけてもさおもられまり
そんなるくるとくへ海わうぐ人のあり哀
とをまつまつけてもこひしきのとのぐきむ
うきあそれバ例よりも此方こと海やうまか
孟 紫の文の詞之
きまゝて かくれさてや我なくし心もらか
細 そのあや思すき出きとひるとの事ニ詞也
なりかハむずりじぐくめて心えむれなりし

ちかしまとも
細 むれじく惑しことを
みやうさとバみやこの山の外
もでられ 明 換言を
そ終ること 孟 云
さしのるする之
何のまよつけても
細 此狩衣へつけての冷
云すく 細 何のまつけ
てさしとる詞をよま意そ
みるべし寔ハさくら紬也
まづきうてこをそもそえ
のうこ之 孟 なかすまつ
名をもそするのことを思
ひきつくまうとこゞり
そありのみちわと、明石上
よおりの浮くく
孟 ひくまうう 細 是より紫上
ひ文の詞之字引くきのうま
も思ありきうしとも御ふる
されどいうらぬぞうそそ歌
のまおもかへとむらへもざ以と
お是ハ紫上の文の奥よ明石
の上ぐみるとまう詞かりく

細 明石上の事
かくとえひ紛つきへむゝつてさまゝ出すわ
とおのめり給
やまうりのたつさ夢をとをこ待しず、
うつ史御うちもあすぐりよ、ふでそなさこゝ
の浦ハ出がしおもせよ、ちうひしとえ
なぞりきて何ますよつけくも
旧
こ浦くとみ川をなりくうそあ風り
めへおものすさひあれどもとあつ、浦うり
なまでろくらうさげよりまさしぞそ
よしかひと、う歩くろよつけてをと、
すり ひあくをくつくこと出浦うるよ
紫
うしなくも云ひうられちぎらうしと
まり川らうすきに、えでりのぞと出ひくかる

九四

すひわくせてうく　孟　むかしりのおんのあらくしきまれども　師

して云ひわくせてうくとゑ　西面網　さむまの松山浪もこえる人のうことひ

うくうく　卞　細　我ハ秋さつうよ波八越すじとせひしや

くべきれ又も何より方へわけてゑるる[illegible]

も云ひわうゑてくし

みかくゑつあのてう

孟　業より今さまのゑ

と源八一段心肝よとむる

よ云ひわせて

くえう[illegible]

帚木に根むべうらんかをとみくうへぞかもゐらざ

ぞそれよりけて哀もよ

まりむべしと思う心と云

[illegible]

すらりひきくう　細　名に

紫とみわの絡しと哀

せく[illegible]

かなさし

いまでまうくに身もなげつ

へきんらそう　細　入庭の海

よろひとひりよ今源の

云ひ[illegible]

抱うしてゐうくゑあうへる絃のし哀

よもら孟がうくまのてなつうひさしう

源業のむすきく

悪びの絃のかし浴もぞ　孟　根のかし師

のうんぐうんでく

さよかまうて海こしるよ身も名かけ川べき

らちすり川まうしけかりぬやどろうね

老年の父母まれで

あのりさまのあくいつのしよ人るよく

とハひまりしきく

よかうべき身とはせやぞうりしりくしてそ

こ月しゑくてそぐつうく月に[illegible]

とうんともあやまりしんぐうにど[illegible]

うつうくいうし　細　独身とてまつ[illegible]

うるてそくうらはひく[illegible]

とやまえんと身上の云ひけを[illegible]

おま人の[illegible]

細　源の根

かりひしまうそとゑ川よゐすせれどもあぶ

おつき海ハ[illegible]

らうかりてゑうてふくしくぬさ海

細　源の人せん

すうぐ哀と八月日本ゑへてかお[illegible]

細　紫とし

唐んじとゑさいさの地形つつきくてし年

月とそぞし絡がしですうびりもむとひ

を絡らんがいとんぐうしもてれバお[illegible]

孟　墨田[illegible]

しげらかくるし絡絡となさ海ぞくうとあ

めく云ふしてぐり代うきうけうりうとき

こべきさ海よ云すしまつうらん人の心ま

ちうあくさすのくさ海かりいうてそう

うぐすしんゑうちら云ひをと

と絡しんがいとんぐうし

細　紫上の本をさべき

とくし師業のねくく云ひ

すつうんとし　細　紫上まで

きふう海く

へのわせてゑせなつうとえ

四けば絡と又絡ので宝て出

上の[illegible]

べしきれぞ[illegible]

るとしかりくし紫に絡会の内

の[illegible]

てうりすさくでき　晴一注

[illegible]

よつくせく[illegible]

候[illegible]

あうられ[illegible]

んく人の本哀[illegible]

あるべき様しとあり。笑
とみなるものあらそへし
いろこりそくろおかまいはれんなん
細 同所よは出しも給へとう
きともと給しし孟源と窓
と給ときまへでし
いうらりべき 細 此所まつ
みうちれどありわるべきことく
蔭子也ちく 弄 玄のくへと云之
年もかりりぬ 細 源氏京を
かくく三年めれ表れるを之
六七紫し此年御深あり
古大臣 細 髭黒の文大臣
世系名房の女御八髭黒
黒の姉也

よろふはんかうしん、二条のきさきも、ものの表
にかくさむらふすく出かし給ありくれた
すずやしま給とりきこおろかまつやがく（文）（細 日記の事まうまく）
こらかれまる様をせふさせ給へやうしはさまてら。
いろろんべきれまる御どもしよっおろんべし（河 是御悩の事也）
とらぬしらよれらんのことおうろく。
世中さ御ぐよのく君らさうのゝここゑ（当代之）
古大臣のはむとめ承香殿の女御のはりう（せうきやうでん）
も男みこむまれまつる。あるよかり給（細 此まにて男今上也）
へていふしいひけるにし玄承まてそ御から（細 冷泉院也）（譲位前）
世の給りわ出御やけのはしおろそま世
とまらりかりへさんへと出かりしめらんは。

みりて日さく宮之御り給べ
きせんじくら
細 書よゆうられ給きぬお
おられとえりさそてう
とゑまそしさゝら
つるのすと 細 ゆおよへと
そひしく 抄 源の心も絶
よい論京はへしと出かり
おうしゝ、修世無雲の宮ひい
ぐとと出かりつくしく

これけんじのくしけをまいらせてまいらせ給（昔の宮之行しむ也）
おくりしうあのまじとこしおれはづるよ
台のはいさめ代もそむきてゆりされぬ（弘徽殿之）
へきさごめむきぬ。こそよりきさ代もれ
きのくけりらやともひさ御ぐのよあく
きらしきさうさはかしきはひとまうききさ院
つきてそだとえ給えこしや。こもろとくうか
りまじけり。れめのるやとさへこのはなども（細 朱雀院）
くろしせまてりのころ御きく出御されれ
それハセ月ちよ日の御ころよ。又うそねゝく（抄 えんづきころつかあさり）
京へくりまへき宮斎人ぐ家つかれと（えし）（源の心也）
とかりひしとどよのつねうききよつけても。

さるべきさまに
つくりなしてすみけり
けしきなるべしとなり
そこの人ハいとをしけれハおもひながら
ひ給ふ
孟 磯辺へ細く出たる
所 明石の入道の京らちにもあまた
六月斗より 細 明石の上の
懐妊也 弄 京よ帰京の
御後あり先書分なるに
明日
まいれまじへきをいひかけれバ
別まいるあらいきたる也
まくなんでしまろをとそ
あやしく他念ぶべき
細 一生難有なそひのゆえ
くさきとへ今おやなく
なくことぞこれも宿
同たりとおもひたり 孟

いとなかなかなるべきさまにこそなりげくさ給ふ
うちはなれにくきけしきにつけても
又このたびはいかにしてとおもひくるわれにこと
どもおりしらずげなる入道さるべきこしく思
ひながらうちくくちりぬるみなさりて
おやゆれど。おもひのごとくさへ給へてうそし
孟 思ひのごとし
まづおもひのなやみにはゆるめだしみをひなる
みそ。そこなハまぐれなくさてうひ給ふ
月つかれら。心ぐるしき気色ありてな
やまうりくけれまべき行すれば。おや
めくらおやあり。らんおりしうを
哀にかなしくて。おやもらいのらべきおよ

のこともとおもふなど
つるまにハなりて
細 我を出し時ハ恋に有て
ゆくつきは秋としまに此
浦ハみなくうきもとへつ
るものどもき別れに
一人京のものもまいらんと
月もさらね 細 七月の事
まや京なる八六月とさき
給ふへあはれなる事のけ
しきといふ。初秋のさ
まく 明日 秋 弄 細 皆下総
八七月のさらて八月なる
思ふにハ我七月六日日京
わて京へよりおり。ちそ八
月よ帰京とさいてなり
給ふべきなる京に事
秋をまちかへる比なり
いまもむかしも 孟 今もと
八明石の京のおもひ
人あるべし

をまもられとなげしこびえる
おもいらずおもひなげきよりけると 弄 帰京
さりや。おもひのほかなれしきとよぞ 源の心 源氏へおかせしこと
さら給へしどつるまへゆきさまぶく
あんと。わけハなかしなずさあまこれを
もられしきとのれいぞとらのなやハら
つりなるべきとなげきまなし哀なり。 源よ隔
らぬ人ぐをほどくようつけてハまろこ 住の心なし
び出京ありりをはしむくまんぐ念
ちまげなる給おうしの入道なるぶまれ
て。月もさらぬ。かぐさへ哀なる気
色まやさそんなりぐいはうともむりしも 細 源の心なし

此うたやみくよ
此供人数ぐれすくおもへし
ら家にはなれて
あれべし
供人の心づくし
別のこゝろ源の心ぞし
かなしきハ明石の上也後に
でしるしとしてよむ
少納言のことぐして
細 良清ハ若紫にあり
しものなり 眠 小山を
の袖ぞぬれゝり
うらなみず 細 きゝめ
あるハ人の心を良清が
心も我をひとしし也
なる也 眠
さやうにもあざことなる
今ハ…

そゞろなることして。心細くそうらうかなし
んとき淡くよみし。…
きゝ人々あらぬ。例のはらせぞこと
いまうむつゝめん。月ころハ…人かり
かくさるを。いとゞくいまぞれるとしまへ
なつかしき経これにもあやなくよゆく
の人々心づくしみとつきたる少納言
なべしてなくいぞらじめれとやどとさ
あさあへなど。さぞうんぞぞうわさ
てだらはからて逢いのやうよいそ
もあらぞまうてうやうかな

あぶらしにみ者ハよく
おりて大将なりまそ
くらとうくえをみる
なべしし
なべきさ淡みく
細 京へむかんと思ひ
所よりさき淡そよ

まぶらをおもいなく
細 此おもて源のうら
撰語も此ぞの御契
ゆりゆくもちもにり
て八幸ならべきまし
めでたさみしも我身の
細 うるさらもつけてかく
思ふ也 無明上のこて
らせ

けさうさ淡しても淡しうもありうろ
れども。そしてしくくらおしうめでさう。
はるべきさ淡みくむえんと思ひなり
ぬ。さやうにぞりしつひすぐさめかなしこ
れはうちそ経。ちこさうよもいそれ
ばのはなこなひまいつて思やともなほし
そ。いふさしくめでくとさきは経みく
こゝろゞしげるるろ思よそらぬくを
つ。義日めくちぞうみるハいでうくら
をさいまいそもかどくやまさうんと
まぞそ思めれどめづくさるみしも。我
身のほどをおもふにもつきをくずなく思。

三ゆやく旅　細　折りくはら
らとえるれあるべきれ
かく秋の気ともとするゝ
されバ身をつくしの墨に
も夕の煙となく書るハ此
時のすりとらうよ志めぬふ
かすくぐし　暁日
このぶひハ　細　つるよ同方
になびくへきこと　師此心
うつくねバ京へむくまい
んと契のふるのこと
りきれめらく　細　とらあれ
めらくこ　盃　うきうめそ
こもひハ出よそくさり
師　海士のらくもなじ身
を卑下するやうとうあ
つめしうもひハあれども
身の外どもゞねるきれ
バ今ハ此浦京のなにしよ
事じきとく

秋の風に八首絃ふぐさこしるすら、住やく
うかりくすりよきるびきそ、とらあけめき
琴のさ海なり
盃 深き心あるにて
此さびハ生判琴ともりにはやく娩を
わすりくるよなすびりんどのまへで
吟
うきつかくあまのさしよの琵琶ひゐも生
細 明石上の行くるとなる
ものひゐさうくきがはをじ。教ようらるゝき
てごしもぐるすろりのりしぐさうべきゐつ乃
明石上の箏のことのまく
はつりくるなじあきりくびや、中曲、このつ田よゆう
しぐらめふりわく稀るじ。さうくよこさう世をは
細 事と琴ふよせくら
らぎうつ絃。うたじう恨ミ孫。さうしべきく
ミのゝ志のかどくりのひしこしたじかふもの

東よりそておりしきらし
きんの法こと
源出京の時より女長
より後への事まであり
かゝき秋のをうつハ
源取り琴の緒のそ
やる事なり

入道のこやの
細　篤雲出段　箏の子は
なり　師　源の明石上の
ことのねとさひくるぐ
まふくし

好て、京よりておりしきんの法
こしつまつそしで、こゝろつくしなるまう
べき後のさきうきあゝしまゐる。わうさしまの
細 明石上と二人むかふ
そめなをしるえんさるし。入道もえさ
べくゞくさゝのこゝつてさしいれう。
盃 哭之
こ同うくもいゝくすさくさくそぐのまされ
琴と云くのをよそへてこ
てゝとゞむべきうくるさしさきはるかくる
云八箏のこと
乏くしおのひやうよしくさう同ぐい
とゞをめさきう、入道の交乃法ことろ
ねをしゞいまのみ、なすさりのうもひさく
さうハつまめしうあなめでさとさく
人の心ゆきてうさらきへもひやしるく

はまいとくきうなきにほとの
先帝の四宮なくおります
せいぞに限るすきてそう
わくうき喜ぞ
細一うごあうし　嘆　わさ
さ喜しハんとともう
いうよぞかあおうん
や　孟日
うろやわうき指よひき
さし　あく　ゆうしくの
うちおわうやうの心なう
へし　孟　うらとりても
ひろぬし
うきぶらよ　細　一言と琴
にそへさうく琴ハまこう
きあハまらいぞの形見
めともうをそれハなくを
ぞうしもかうしく
師つきをぬ喜ハ源の心熟
し源ハすきぞうよのあ
めうすと我ハあらくれてさ
せずて無慈悲なんとし義
うらうこや

ことハげまいとくぞうろうきにほとののうちい。
うれハあくまでひきすまし心よく弾き
細　源の深妻いともあらしと思ひとまどほりし
さねぞまきれる。このけうろうよござるよこんじ
めそあうれはあうし、こハまぐころてなれ給
ちぬてみじころやましこ指すひきさし
源の心
つおゐすめほそうしなさ。月はたゞしさえる
てもさくるしさうつつんしゆや志く
めほそうしうろのさぞうゆくみれのちぎ
噯ゑとハさる夜源の琴へハまさうせううえ
あをどのうし給へさんハなうさあいすら
まぞのうてをよとのすまハ女
噯
かり我さうまよめぞくおうひとことを
つうとあねやゆけ

うらくおいて　おもぶう
よおめとさうると宿
とうくとうへ源ハられぐ
深くびみ笑みなうの心
あまぞの　河中の絃とハ
調子の絃之。穀の絃とも云之。
花中のをハ去より十まその
絃をいふや。調子のをとる
べし師くこにちぶう中と
緑宵の中よいひかけて心の
久る申ぶさるとぞて
あきまふうべし
花　うらを
うらをそて
てくい河よ幽泉の心を
よせくう　孟日
とくへつう　花　往来　皆
名をもあうしてうき後
のくるうてよ身をまぐへ
んとへくうし　ならんとよ

きらむぞきひをどうくしきまそ
源
連まぐのてきよちぶう中のその
細　やそとふう　花　久く
へいこよりうぶうきん。このぬさ
もて連見んとふうし　孟日
こまりすしん。あひらんとよの
めり。されぞしさ　わんびど
おり　噯上の心乙
さい我りひきうも。いとこうなう
さう給あつきハ秋あくう　弾絃て
ゆ絃の心之
へのんぐもさはうしくれバらをそ
人の通同をいうひて
ど。人我なうしひく
源
うらきそてい河よ飛るさ流るこ
まつよと思りひやうれはけうう
噯
とし へつうとやもおれてうきる

なきさめやう紙さぐへありとうちひろけ
ましかる紙こまかにかきつゞけ給へる
ところどころぬらしつゝ人々いみじう心
にしみぬれどもかしこうとぶらはせ
給へるいまさらに御ともにさぶらひあ
ひしぞうちなげくなどは
ろかなるべしものおぼえずなりぬるぞ
ともすればこなたかしこにまうで
あはれ見ゆるにこそありけれ
ちかく見れらるゝほどもあらぬ
見るもかなしうそぶるにあはれなる

人々あのたちのきみにいつの
めづらしきいまはいつのまにかおほ
ろげのちかひにて御衣のいろも
おもひのほかのあさぎにて
そのほどのなかにありつゝもなほかく
くちをしくなむおぼゆるけしき
おもしろかるべきことのはを
しも涙にむせびてかきつゞけ
けしきやうのいとあはれなるに
つけてもいとかなしけれど
ぞうぞむつかしきのみおほかり

もちろん八宗もあるべ
けれハ日数つもりて申せハ
衣とうこゝろへつみ志ごゞハ
前の新明石の上元
うろさしあゆとそ
細 今入道のなりにて志路
之 師入道らしてそなき
つとしうにて法装来るらとて之
出家のこの 細 此身ハ今
生とゆうつりに異なる衣を
さらりけうせ 遁世ともと
とハ世をいうふんを海よ
まぬるへ(ら)ちうし此岸とハ法
世の岸と彼岸とハ菩提
をいふなり。我ありをなり
盃 彼岸よハいつてぬらん
とくよと此のふたと云へ
うり
仏のやこハ 細 子と思ふ事也
御ちうよ佛よそらよ
をまつてぶそれよつきせ
むすめのうかとよぶべし
もうしや 明盃日 師さらひ
ぶふどいふ郷にて候さし
きよいうて(ら)文まいるぬ
立ち。闇よまうしハ入道ゆ
れぬ梅すればくさそむ
をめぐると我よいうんと
てひ知るし細く
とふくえなもとし
細 やそしてへぐきをせ 師 只
と明石を見る持て帰京
ありハ信るまとうに他ども
よえを心とされんとし
うけするう 細 明石上を
ハやまくもろつらくえ仏べし
この信家ハ又まうてうゑべ
きさうすもくうしとせ
我おし 師 雑粉の異れ
出家うしことをんよあち
て又修行しとこ
ひとゞ物思ひしむて 源乃
此を後とるそて入道法ちろ
どまゞゐそき面く
まうかへ 盃入道の修 歩
わけてうく 師 入道さまで
老耄の齢なるねど源の

とてもすりかふ。(明石の方へつかハさるゝ之)弟よるすれしうりどももとつ
うきすげよ今(源の法衣を着ても恐ようる之)ぐへ忘のぞれあるべき
ことをそこへかうきあるらんえるすしぬ
我ぞよ向ひのちうりうるよいうくる乃
うろふと志めぐらん。(細 遁世の身なれとも之)入道いまうしく我
きすれ修行しとるすれども其ふの法と
らりよつうてす何らぬこともすどりさく。
(久ひをう)ひ何らるをいそがしまづるうき人
しるらひめくし
(入道)よ我をまつららむ志用じ此身と(弟へ別れの之)なりて
我此岸を(き)えてそるれね。仏のやといいてく
まづひめくしゆれバさうりまいるにして
ゆめして(細 ひそかのうなどりよかりく)くるこやうするれとむかり
いつくさせのふかり(明石上と定めるんふをとれなふるとのんく)行しうぐらしれ事なる路
つるいうしうものをあくられと思ひて我を
(明石のうるう海く)(お 源のまなく)うらおうこまつるはすこのそうりなどもの
んさるすくみて路地りひをそぐきさすら(細 源の行之懐姓のるそ)
をあめればいまいとやうくとる我し路さん。
さびすることを接(すそ)ぐさきれ。いぐを
べらうて
(源)さやこ出し其のなけきまとうしめや
とうらしき別れの我ともとそのひ
あまへるまいとぐ物思ひとぞ志用されまさう。
立るもあさまうしよろ用ふさゞりど乃(盃 明石と之)

別よ力落しうらゆへと
見のうさとりうふく
抄ゆゑよハ身のおどの女
バぬを根本のうらうく
とうろうきる　あれど
源の北陸京ハまして明石上
を捨の下向よハおくねばう
らうんもまうらねきう
されどもさうへ女のむかく
ハおもやうよおもしふべきる
かなべし
母君もうすくさあ捨て
山ぞめのおかくと慰め
捨て後悔さうく
おあり白や　孟おあり
きりやとく　細入道の詞く
抄りさうそじきとく懐妊之
きうともぬかとふ
源の北懇てうらんや
とこし
おゑゆかしや　孟悩そて
びてたそうれさう祈を見
ていまりしやとく　師ゆきとめ
どいまあへしらてうぐあ
うち詞之

うらはてらふべきこともなくてこうしき
人よりことにうひそいけれどこのうきを
わしかくとうりありきこしすれどうらうすて
まる根のやりるこそきよ両親をひてしき
をれげなきさましけさしくはしておぼさ
抄せんかたなきちくよハうくのをとく
よ思ひめりなく君をもすゞさあうひてお
おくくころづくしなうこと絶えひそめ
細入道之
ゐんをべてひかくちきひとま思くさひゐる
尼君の心れおやそうこととく
心のをしうらでいふおゐすやぬ涙
しもろすじきこしを捐し給めれバぶう
孟むそへ入道の詞之
とくと旧を前わくらんぞひるすごさあそて涙
ゆるじくやじくよあれおうおゆしらや

あてそく君までひかりあう
ちをびひおりせく
入道のびゆみくうう年
とぞひうられしと悲しも
よいひおぐくく
いとど分けくまうく
細入道のおうき御之　孟入道
かれさむ
あるハひ一日いかのこねうし
入道のなびそれするあうさ
まく歴ハ秩日寝さし夜
ハおさいすると
まぞのゆく末もさく
なこないともととうう
しさ海く
月夜うめぐく行道よる撰
細入道のうすなりかの字
うりハんおさきおり行道
まうえや
うあうひたの
生みの親の白き黒
なり

くうこすゑまうりわくらりめれいとくく君おど
嬰児のこと　嬰よ君すく
ひかりこうをひおくをいづうしらへ
ぞてやすこ海まそてさゑすらんと年月をさ
源よありせさうすくとうて
のこるいまやそひるまへとそのこと安
えつれあびかりさうこととりのこそらめ
まうかなとすげくをうそみをいとおし
それバいかが旧それて出うは日くとひ
いかのこねらし夜ハもとくよりう地さる
てだくのの行末をもとおくんまうよならとそ
まう川亡郭の詞之
手をすりしそりておふざおゐうら牙手そま
細こうあくいさむうそ
あざおられく月夜よゐく行道よう掲
ハやりう川よしうれつうよそわりぞうしある

ひろうそくの歌
是今、勅撰よりて急
きかしこうりまでにしるすか
よみうつましてよみうる
ひらくの歌ハ配所又ハ旅
垣面風の何の題歌なるとも
仮り所とらして
題の人のくさおとづれ
こいそがしきなるべし

女房もくひろきにのよ
おれ出京の時命まゐ
てめのまへよるとしうを
まひしつかしく

いそのくさそばにうしをつかさどるひ
くやみししろ思ひける人ぞいりの
まぎれきみまゐらするゝなりて
細流より源の御ことぞ
（孟源より別をすゝむる事也）
難波ハ上古より祓禊の在所也
れいのくへし給ふ御ひとつもかく
なくの歌とろしやべきこのしにつゝひしそ
やさせ給ふ織よ所をうしていひ
まうで給ひしとわり給ひてかえ
どなくてかぞへ入ゐ二字絶よおそし
京へ之
おしこきてわやとの人もれとまとの人も
めれうらして御ひとつひかさも
喜
啼
ゆきさまぐ立はさうり女房よもひ
いのち
あさりのよはかりしそてつる命捨つる物

いまはとてとるべきかなし
孟源のくよ紫上西今あ
まうれあまたの思ひをうつ
かなよ付て又心えよか
しくと思へでかりひなま
ぬとのかし

ま絶うしてもよくろくる
細とふかくよ人のの若
りうろとはくしまよ
なり

その人のてくもなし
細のえ人のかしと紫上へ
くくり早まゝ

う絶ハ世をかす
細島しるて身とは思はず
あかひてし人の命れる
くちあらぬ

きこゆるしいとくしげなるわびしくの
紫上の御
おりてぜりのちひろ思ひよまごころせらり
しれぐしのふしていろぐれわらうじとらかど
細紫上のうらやなき也
うめぐさきなき絶はくてなるべくいそぞ
しとれふかうみなるとけてハまさりの
あうなまれし人の心のふかくも、ふかく
紫
しう思ふしやらうなる絶にきねうらふ
すまでれふのよしまぞさやそのへれこ
地
とぐもあさうえ出まゝり思ひしおくる
紫の
れ見えむきうれうゆきとくぞかすれ
やさまりのかうん日ぐさしるし絶ハ思
くれなど派のめかしまぞ。かくしうらう

河ころに赤ふ　細くるゝ
ごまく若の人のうけふ
つきこそころとこあろ
わまさこあらく　孟　築上の
行をひろすてのほろく
世の中もうらめ
細世の中のすあをるこそ
築上うるも帰給つひそうて
もえる世上と三てのさそう
ようらめしらせ中るる
とく　師　きうきまひし世の
と見うろめしうてとく
りもの付位　細花鳥よみて
ちらで君八流罪の人八論
ずるく八叙爵よりもべき
ど堂八させら罷るこさ
かよりうての泰識の
大將よなり給之花　配流の
人八めし返されて後六載
のらお身の平位よ叙
と御ま花　細の位よりさう
よ叙せらる之但三位已上
とい奏吹して別勅とろく

さしもひさしく給ふ河こるまじにあらぬに
さ海をいとくへさてつもりし月ごとに海き
おしきすで世すむくもこそしへしよの中
をいとしうらめしう给ひつくもとのれ
位ありしをしあらてかゞとりけの権大納言
よなり給ふ　細帯よやかるとおそき
里人すべのつきさふしてまつふゆきさ
むりしうれさうしまのまよあるらら
ちくいとめでたくけせめあうてもうら
まり給ふ　世の人よさうしひあまりのびきり
細よろの衛と　源の弁と
くいそうろりのひ何りのことをこそよる上
しへ給つしんとしよりすへ女房きこの涙さし

ありよ源氏君八最後の身れ位よりりまりて此間の官位八参議大將なれ八則を官ろ
あつる生ろてやうて権大納言よおろ給く或おき百寮おん將く大納言中納言参議宿也
つじよりの権大納言　細大納言昔八三人く源氏今新任し給く花鳥よ委えるる也
明花云正のかの権よなり　上古八大納言の数二人寛平の遺戒よ八正権三人と
花鳥よ強中にうり正一人権十人也云々　職原曰　按公卿補任寛平九年大納言正三位右京
时卒一人也六月十九日聖廟并源の光此両人同日よ権大納言よ任せり権大納言此時
始る也此説を按してりる職原抄今云大納言二人云々今の文のしく令よく二人の
か八くずうらおうれ八権の字をつけ寛平遺誡云大納言加遣権正二人云々
遺誡のひきりバ四人よとやうく数のかハりくしさせおりく官の外ハ八けも権の字
をつけうよ源氏も権大納言といつれ給く中比より八大納言八正一人権十人まであ
れえしきのまよあるらふ　河　寒灰更煖枯樹復栄　續日本紀　抄書金藤篇と
引器く
めしあつくこうつよまちり給
くへもさうしう之
皇之集催陰く源よ対面
と細まふけり

おせ　源氏勅喚よ應しそ参内し給ふ也
けれしうさうふしうひておいしらくかゞときとれすを
しくそ今日よるすきほどさめでさて世の人あらく
をもいりしうらんせ浮されくれますひろまと
とまひきつくろひくぞれつるしなれ治
こうちいすこへ日でろへてさせ給まれど
おせ　出御

ゆめばかりなるちぎりにて
かなしき 佛不縁の事
まつりそて 御位をとかれ
をのがれてゆくべき
ものなりとも
細 面白勅定也八月十五夜
せよ翁の真名 嗟 是上
の源氏に作らるべき 御綱
いふことあるべきを 御綱
面白し
きりのさむきに あかれ
河 大海 万二 御 神 日本紀
海底 長撰式 海若 万十二 是云
うみは海の名也
あくまでうかれ
うかれてはふかるゝ
さらん 細 物ぶびるまで
うまみようあひゝの 海り

いかばかりへだせまつるとてものかなふをなし こゝろとつくし
かしこきまゆかきれなく 御物語あめや
さまわりて 秋は いかがあ 十五夜の月れ 嗟 八月十 釈迦や今月海宴気
ありまたあかなくいそのさしくへことなり
しるしまたあされてあかさせ給ひの
ばかりくゆかさあり 朱雀院の御さ宴之 とどかしおぼやひたどく
もとはせらもこしのねわ
こさくぐくめうもまゆかれとの給
あそぶ
ま河海にあまつへしふれひるの
あしてきりしもいつまでうとさゝるつえ
うさんべうしあきれり るやうしく 朱雀院之

らんやうせよあひねわりしくもきもしく 釣縄 只ミ濱といふ人あらく蜑子のあまされしき 翁
せ蜑子の見るゝなばせよみえあまく 日本紀ノ八蜑子と芦の舟のせてあるをと
いかれどもあれはねのうかんあまりそれまでの心をいかでか見ゆせとのみえく
釣縄のたぐひよううりてそへるぞ
あまりつ 細 以是云文なり
あまふといふ人あの極
綱之遊之の裳不用之
嗟 めたりあまふといふ人の
の字称也 遊蕃 年久
海浮 無盡 紀 原許宮遠
蕃のうちを古称ふあり
引きわたしたれ 八十一年
あまくさりくるれ給
またはあまりにみえしきれ
よくまやきたりてめぐり
あまく立羽 伊弉諾 伊弉冊
日本紀 伊弉諾 伊弉冊
尊 天の浮橋とあぐり
て二面にあひなりあふ
またぞのうへる宮継め
かりあふとあやゆうべき
よしや蜑子のあまりねる
ども又いさせあやうけ
わがしくゆかりは紀気とさ

かきくれてのみ
御河 あまのしらめかりしかれば別
しるのうこそのとめかりまめつかしき
かか極かり 浪の行くあむまだ 八幡宮に
おもうさへさまてまがりかりけらき 細 今年十五夜
まかう給へ とをまら給まことおかかけ 一名 紛
砂浜を給 えかびあるてあらの御二体く
給ひてめぐりゆかさ恍ゆへいかけ浪
浜のうへく
あまく哀としてそまつり給 御ふうえもこ
まろく海さうしせあそびさもあら給え
んにそくかあるなくてうけらへ

了　同じ家共仍ふとこ之人ハ家柄といひんるすね遠ありおぼゆるや
後の所よある佛八幡　細　源の所縁也。家よてハおしまし　師　此亭のむかしめすよ源の御孝よいとこ
さるかりしありくつるをみあるおぼえる語しとうるあく出むて源氏の別より法事
すぶのすあるおりあり。善行の佛仏預勝也
世語するせ語らんよ　細　末よ良縁のるすあり人ぶる所ま先ま出せる

盃　落葉これより末ま他之

えませのふ。入花のるやかも。はんなとこしを
げめくは對面のかどふとおもれなる
こうじとおもんうし。織やゐの明石よハ。
細　師どうの人けるるよう。つけ語く
海り渡まつけくは文つるを後。記をこの
うそこれやるまる語めり。彼のまる
くいるま
　　　　　　　　　　　　　花
歌つてあしの海よ船ぶりゆくんやし
人をおもひやうるふ。ゐ師の生をめすならむ

しりげるこへし。仏ハ人色
仏ふしかばさつておくす
彼へしくまり思ふらやとの
うるさ余く。花後出る所会
とるかんなるへしい仏る
と住人のうちむしん往
承歌書のむかやるすぐ思
歌くて　細　明すりしせるる
盃　とうりけてゐるし
なとのまく　　　細　文の便
歌書の会れ仏ふるくゞりゝしるやりゝる也。歌書よハ妙なるも源のるしをしそ出兼語
人とこるさよりおやりての語く。文乃家ハ方出家身すめ。君つる行海道の奇よ書るるゑ
わり立なげくいうてしもりすせ。此えりてそれバもずおひの行来ハそゝのくの子ずむち矣
の書とおりがべるしや　盃　入花之付よ同作更べらえぐうるさ余くし。一よハ明石へつるえ
ゐるよ出うれるふやしおひやの仏。一よハ万出ふよ武りもむ海への奇よ書るらば
我ま君も。く出しもるませ。此あのんくえ書うるんまるまなるく出しまることゐ
ふくしてあ義之作明石上の桂ハ歌ぞおりし歌え立てるまんさ余とおやるとく
ゐの師のひとのめ　細　太武のひとあく。使ゞおうく書住よせし人也　暁　數里れ師よ住ぶるとくみ
太武師の様を行ふおよ師るるいるく
物むひさあめる　細　歌よのかり語るやうるく。花香紋也合、　暁　わらるさうく人まれむ
源のるとと思歌さしるすのどう海後し語よ従て家如くるく
まくかるさ　細　まどいの世あど信よ云ぶどうし。ぞくそうくるもいう世むきく月とくいぶ云ぶる
御く　明　幾句會又作箋二
此源よる見のるあり採決
よ悲し
とあのくし　盃　又巳の出海
よ源の出席の時仏とこせ
しるすくんるをせしら
袖ハ柄ると世よ發足

しりてまくるぶこりくくしをそそさししとよう接
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　師　源氏ハ一言仏
きんへ
　　五節
すまのうらは仏をまとしあまん人のやがて
女しりとまとしなとこめそゐ火
つるとろ袖をとるせなりや。てるまどころまるすく
　　　　細　大武の娘のよ語とくんえくるりし語え
まあるらしまえ
まるりよんりとう給月をと海みて。法
うるれ

かくてはかくとやせましとせふるかし名
ある袖のひきとゞめしとおもひはかりしと須磨
よくすゞりかけれど・ゆかしきれなるそこ
しかの浦までこのたびかもやう乃 須磨寺の此八重の桜は古の名木
はまかひさしくすまひあり・花
ちる里などみてしらで浦せしそこの
里ふく須磨つるくもくらしめ
げありとしれん

かくては〔細〕かくとやせまし
ましとはかくらやせまし
とて須磨の浦にかしとかくて
かくらの袖くさればありさま
もせずしてかくしを
の縁かく花をよみたり
〔花洛桜〕ひとつに立て
ありしに白波の名ある神の
ひかりありし今来よ
せふるし名ある浦をさして
ま・須磨の浦とかりて
よめるくかくとやせまし
はかくらやせましと須磨
の浦によりし所の名なる
の舟とよせたりけりに
一声ありてかくらしき井を
かこ川かくりよひかりしく・〔暁〕かくらやせましのくかくりかくしく 撲の桐通なり又不
よしあしかく・須の名ある須磨のやうそうかる袖とよそやとありよつきそしかくりて
かくやを申しよふり・そんはかるらしくそかくらうべきしなりかくらは波を立
あびやうしと 〔細〕此須磨は須の平生人なれど今はかくらすくしくの縁
ありしめしけせ 〔相〕須磨にて古ひしは只歌かし平也須磨寺にて古跡寺の根あり
是べありイニ世よ立てしぞをのくしぞしあり古蹟く